

説の此等の哲學系統に基き且之と共に生長せり、
吾人の第一は合理的神學を述べん、

ローレル(Rohr)千七百七十七年―千八百四十八年)の、宗教上一切の事柄に於て理性は無上の權威を有せしめ、理性の己に反する一切の教理を却くるを得ると云へり、則ち氏の語は曰く、基督教神學の唯神の存在及屬性と人間に關する教理とを論ずべきものなり、彼基督論の如きの其中は含蓄せらるべきものゝあらずと、

ヴェグシヤイデル(Wegscheider)千七百七十一年―千八百三十九年)のハイデル大學の教授にして、哲學的理性と常情とを重んじ、合理説に基きて聖書の解釋をあたしたり、

ポラス(Paulus)千七百六十一年―千八百五十一年)の、幻像を信し神秘説を信するの故を以て牧師の職より貶せられたる父

の感化を蒙ると頗る強し、而して氏自らの他の極端に走り、自己の理性に反すると見ゆる萬事を信せず、且一切の神學上の眞理を數學的に論證せんと勤めたり、氏の二大著述の耶穌傳(千八百廿八年)及共勸福音書(千八百三十年―三十三年)なり、氏の超自然を否定し、自然の原因を以て萬事を證明せんとし、常に二個の疑問を提出せり、曰く此事實の實際に生じたる乎、曰く如何にして此事の自然に生ずるを得たる乎是れなり、今氏が試みたる聖書事蹟の解釋の數例を擧げんに、マリアがイエスを懷妊したるの敬虔は基ける精神錯亂あり、イエスの誕生の時現れたる天使との隣火に外ならず、福音書中は醫療奇蹟として傳へれる者の福音記者がイエスの用ひたる自然的治療法を記載せざりしは基き、悪魔は恐れたる者との瘋癲患者あり、復活との昏睡の有様に落ちたる者が恢復したるの謂

かりと、氏はキリストを以て純潔なる人物、人類の幸福を來す純粹なる道德の教師なりとせり、要するに氏の宗教心を欠き、加ふるに人間と神と直接の交通をなし得ることを否定せり、ラインハルト(Reinhard, 千七百五十三年—千八百十二年)ストイデル(Stödel, 千七百七十九年—千八百三十七年)及プランク(Planck, 千七百五十一年—千八百三十三年)の超自然的偏智説と稱すべき一系統を立て、キリストの吾人の上よりあり、吾人に勝り、且吾人に異なり」と云へり、

其他思辨的に基督教を改造することに反對したるブレッツシュナイデル(Bretschneider, 千七百七十六年—千八百四十八年)あり、氏は一書を著し、其書中約翰傳正確論を攻撃し、且此點に關し爾後學者の執りたる議論を悉く網羅せり、然るに此書の却て第四福音書正確論に關し、方ある答辯及議論を喚起し、遂にハ氏

自身も其答辯に説得せられ、該福音書の使徒約翰の著に係ると云ふ信仰を抱きて死せり、

ツシルチル(Tschirner, 千七百七十八年—千八百二十五年)ハ温厚賢明なる自由論者として、基督教の倫理的元素を重んじ、基督教の人間の良心に訴ふるもの、且良心によりて承享せらるべき者なりと云へり、

デ、ヴェッテ(De Velle, 千七百八十年—千八百四十九年)ハ、エナ大學に學業を修むる間にフリース氏の影響を受けたり、フリース氏教て曰く、人間の智識を得るハ單に理性と悟性とにのみ依るもの非ず、心情若くの感情に依りても、亦之を得るなりと、加之、氏のポラスの説の影響を蒙ると妙なからず、去れど人間の美妙性若くの靈性に訴てポラスの極端を避けんとを試みたり、氏の千八百十七年に舊約全書の歴史的及批評

的總論を著はし、書中五經を分析して幾多の切片となし、申命記をヨシヤ王の時代より引き下げ、夥多の詩を以て後世の作となし、極端なる合理的奇蹟論を反對せしも、舊約書中の奇蹟談は大抵古傳虚説なりと考へ、且吾人が聖書を研究するの聖書の興ふる光によりてのみあすべきものあることを主張せり、氏曰く人間の宗教的感情よりて有限界より昇りて無限界を知るに至る、去れど是れ吾人に興ふるに眞理を以てする者に非ず、唯眞理に被らしむるは表號、古傳、若くは虚説を以てするものありと、斯くて默示の實在を否定して曰く、吾人の過去の教理的紀念碑より其表號的包圍を剝ぎ去り、而して斯の如き紀念物を生ずるに至らしめたる宗教上並に美妙上の感情を發見せざるべからずと、氏の其持説の故を以て千八百十九年よりベルリン大學教授の職を免せられ、後千八百二十一年ハ

スル大學の教授に撰任せられたり、

氏曰く自己と同胞の中に生命を發達せしむるの人間義務の原理として、是れ則ち永遠の生命、神の中にあるの生命なりと氏は千八百三十六年乃至三十八年に、新約全書に關する一小著述をなし、先づ舊約全書を研究したると同一の方法を用ひ、書中、新約全書中にも古傳虚説の分子の存するならん、去れど吾人の之を確知するは由あしと云へり、氏の聖書研究をなすは當り、左に掲ぐる數多の疑問を設けたり、曰く

- (一) 文書の福音書と口碑の傳説との關係如何、
- (二) 聖書中の事蹟と其記録の年代にの幾許の時間を経過せしや、
- (三) 福音書の造られたる模様如何、
- (四) 諸福音書は幾許の程度まで相據り、幾許の程度まで並立す

るや、

(五)福音書の証言に幾許の價値を附するを得る乎、

(六)福音書の教會内に幾許の權力を有すべき乎、

と是あり、而して氏の到底此等の疑問に答ふる能はずと云へり、氏の聖書中の事蹟の第一世紀則ち歴史時代より起りたる者たるを論據として、スツラウスのミシカセオリ虚傳説より反對し、且此等の事蹟の一定の方法によりて生じたる者として他の方法より依らずと斷言するパウルの獨斷説より反對する理由より曰く、吾人の確實に之を判定するの根據となすべき材料を有せずと、氏の素と幾分か不可識論者なりしが、千八百四十六年に刊行せる「基督教信仰の要領」なる著述の稍々積極的にして、信仰を解釋して、吾人の胸裡に充盈し且吾人を活かしむる靈なる勢力なりと云ひ、罪惡と救拯の事を論ずる頗る強く、且宗教的威

情を以て合理説より對抗せんとせしも、其論當を得ず、學術と宗教の鬭争は今日に至りても尙ほ止まざるなり、

シュライエルマーヘル(Schleiermacher)千七百六十八年―千八百三十四年)の、獨逸神學革新の結果を來したる運動の發緒を開きたる人物なり、氏の強き個人性を有し、自己の全力を一思想に集中するの力と事物の深底を觀徹するの力を有し、且學術的の明晰に加ふるに宗教上の熱情を以てせり、氏の神學の其哲學より貫徹せしにも係らず、哲學と宗教との分離すべきものなりと云ひ、宗教を以て情緒より基くものとなし、茲に新方法を實行して權威に代ふるに自由を以てし、且合理説にも超自然説にも巧利説にも反對せり、

一千七百九十九年に刊行せる著書「宗教論」の中に曰く、宗教と有限者より於ける無限者の顯現なり、人間に於ける無限永遠

ある神の働あり、故に宗教なるものの感情あり、情緒なり、直覺なり、無限者を感じるの感覺なり、是れ書籍や傳説より來る者にあらず、自我ある者の外物則ち宇宙の方より傾き、宇宙則ち外物の自我の方に傾く、外物の勝つ時の沈想となり、自我の勝つ時の活働の結果を生ず、宗教との教理に非ず、神學も非ず、感情なり、故に吾人の異説に對して寛容あらざるべからず、宗教の働きに非ず、活きたる働にして、眞實の働の精神となるものなり、故に吾人の他人のためは働の形式を指定すべきも非ず、要するに宗教との感情なる形状の下は人間が宇宙と相會し活氣を得る所よりして來るものあり、吾人の神を見出すは第一の自己に於てし、第二に人類に於てし、第三に萬有に於てせざるべからず、而して之をなすの沈思黙想あり、黙示との一切の斬新なる見識の當に受くべき名稱にして、宇

宙が創めて人間に於したる交通の悉く黙示あり、奇蹟との單に一事蹟は宗教上の名目を附したるものにして、一現象若くの一事實と無限者との直接ある關係を言ひ顯はしたる者なり、人の宗教上に進歩をなすに隨ひ奇蹟を見ると益々夥しくあるなり、「インスピレーション」と胸裡に存する眞誠の道義と眞誠の自由の感情を誤りなく外部に顯はしたる者なり、預言との前半の既は實現したる一事蹟の後半を前知するとなり、自己を知り且此等一切の情緒を眞實に有する之を是れ信仰と云ふ、

黙示「インスピレーション」預言、信仰、悉く主觀的の働にして、一切の宗教心を有する人に通じたる者なり、信仰との他人の言ふ所を黙認するの謂にあらず、宗教心を有する人との穴勝ち聖書を信する人も非ず、却て聖書の必要を見ず、且必要あれば

自から聖書を著はし得る人こそ真に宗教心を有する人なり」
 吾人の有心性なる觀念と必然なる觀念を有す、而して此二觀念よりして吾人の有する神ある觀念の來るなり、靈魂不滅との宇宙と合一し、且宇宙の一部分となるとあり、故に吾人の思想上自己を塗抹し去り、宇宙と合一せざるべからず、
 吾人の他人を強ひて宗教心を起さしむるを得ず、宗教の外形則ち殻皮の左右し得らるゝも是れ眞の宗教にあらず、眞の宗教の自己の信仰及生命の活氣ある印象よりて成立つ者なり、吾人の超自然の事物を沈思畏敬するの氣風を養成せざるべからず、而して美術上の名作の大に是れが助をなすものなり、

シユライエルマーヘルの國立教會の思想より反動し、曰く外形の教會の唯眞正の教會に至る一の學校の如きのみ、而して

其祭司及教師の之を眞教會より得ざるべからず、去れと哀ひかき、實際の有機實に斯くあらざるなり、教會と國家との分離せざるべからず、教會は無信仰ならざるべからず、牧師の自己獨有の品格の權威よりて働かざるべからず、平人の皆自己の家族に於て祭司たらざるべからずと、

自然宗教なるもの何等の價值をも有するとなし、猶太教の死せる宗教として、基督教の先驅者としての價值の少しも有するとかし、之に反して基督教の積極的の宗教として、基督の能力は彼が宇宙を見るに其眞の光に於てなしたるの事實に基き、而して是れ實に彼が有する敬虔の念の絶對的に優れるとの意識と、彼の見識の直接あると等に基くなり、

基督の未だ曾て己を以て唯一の中保者なりと唱へたるとなし、若し人々が聖靈を瀆すとかければ彼の救世主たる資格を

拒むことを許容し、且己の後、聖露の降臨ありて、人々を導きて一切の眞理に達せしめんと云へり、聖書の完成せる黙示に非ず、他の書籍とても聖書と同一の力を以て書かれなば、矢張聖書とあり、若くは聖書の一部分となるならん、聖書中、記載されざる新眞理にして後、黙示さるべきものもあるならん、人類が最早中保者たるキリストを要せざる時來るならん、キリストに依れる救拯の働は萬人がキリストによりてキリストの有する宗教意識、達する迄は繼續するからん、去れど其時至れば、今日の儘の基督教は最早必要を見ざるに至るならんと云へり、

神に關してシユライエルマーヘル氏の信奉せる説に曰く、神の直接に吾人の意識の裡、あり、無限者の吾人の胸裡にあり、宗教は有限者が無限者の一部分として有する意識あり、之を例せば、時間なる意識の如きは是れ永遠性の一元素なりと、此神學系統は一時に合理説の紙城と正統説の古砦とを打破し去れり、蓋し此二者の新時期を生み出す産の苦痛、外ならざりき、氏の神學の實に銳利なる心意が當時の合理説と虚禮より彈跳したるものなり、人間の意識は罪惡の爲、障害せられたる者なれば、氏の與へたる宗教の定義の曖昧たるを免れず、去れど宗教、關して人間の性能中意識、第一位を與へたるハ氏のなしたる大功業なり、

氏の神學系統、於てハ辨證論の起端を各個人の意識に置き、茲を以て其與ふる確信の吾人銘々の心髓に透徹するなり、獨逸の僧侶社會は此神學系統を見て驚愕一方ならざりき、一千八百年、氏の道義の修養に關する「獨語篇」(Monologues)なる書を公よせり、此書の首要の趣旨ハ左の如し、

(一) コンテムプレーション 沈想の智識と生長の一大源なり、
 (二) セルフエキザミネーション 自察、悟性によりて吾人の自己の個人性と他人の個人性とを區別し、愛によりて吾人の他人と一致す、而して此二者實に道義の二要件なり、
 (三) 此世界に就て、氏の此世界を輕視し、家族と國家は頗る不完全なりと云へり、去れど一層善良なる將來を向て希望を懷けり、
 (四) 靜肅清明なる眼を以て將來を待つべし、
 (五) 常に心靈をして若からしめよ
 と是あり、
 氏の一千八百十九年乃至三十二年にイエス傳の講義をなし、キリストの奇蹟的誕生を否定し、約翰福音書の正確なりと考へ、奇蹟のキリストの心靈的能力より來るとなし、キリストの

奇蹟の生命あり且信仰ある人々に於ける愛の働も限れりと
 あり、キリストが自己を當時に調和せしめたることを語る強き
 よ過ぎ、キリストの苦難の深意の氏の曉る能のざる所、而して
 キリストの復活との單に失神の有様より恢復したるを、キリス
 トの昇天との第二の死も外ならずとせり、
 氏の神學概論の一千八百十年に發行せられ、書中神學を以て
 確實なる一學術となし、其目的の教會政治もありとなし、宗教
 上の趣味及學術上の精神の神學者に緊要なりとし、キリスト
 の身位及此より生じ來る者の神學の萌芽なりとし、舊約書の
 神學を關して何等の規矩的性質をも有することを拒み、教理學
 との教會内に實際活動する教理の智識なりとし、實際神學、宗
 教上の説話、及實例の模範の直接の感化を重んじ、各個人の信
 仰自由の權利を辯護せり、

氏の教理學の一千八百二十一年、則ち齡正五十三歳の時に
出でたり、書中自識を以て教理學の基礎となし、神の有心者な
るを言ひ顯すに躊躇し、超自然の自から人間の意識は現は
る、と云ひ、キリストを信するの信仰の胸裡の経験の結果は
して推理的論證の結果は非ず、且此信仰の奇蹟はも、預言はも、
若くは「インスピレーション」も關係を有せずと云ひ、教理學
との超自然の方法を以て默示せられたる教理若くは事實を
論ずる者は非ず、却て人間心靈上の経験、特に教主たるイエス
との關係よりして生ずる経験を論ずるの學なりと云ひ、天主
教の一個人とキリストとの關係を一個人と教會との關係は
隸屬せしめ、プロテスタント派の一個人と教會との關係を一
個人とキリストとの關係は隸屬せしむと云ひ、基督教の救拯
の宗教なり、肉の管轄内より救拯する宗教なり、キリストが救

拯の大業を全くするを得るの、彼の有する神の意識が肉の意
識は害はれず、且自己の爲は救釋をなすの必要なければあり
と云へり、

氏の吾人自己の存在は是れ無限者の存在の意義を含むもの
なりとして、神は關する外部の証據の價値を拒み、一切の有限
なる存在の神は基くが故に、神の世界を創造し且維持するな
りと云ひ、吾人の天使及惡靈の意識を有せざるが故は其存否
の確實ならず、神の含有的に世界の中は存在し、自然も超自然
も共に神の業あり、人間の元來完全なる者として、聖靈はより
活動され得るの性能を有し、身軀と心靈の間は調和ありて、世
界は感化を及ぼし得るの性能と、吾人の四圍はある世界は波
舞せられ得る性能と、他人と交通するによりて其感情を刺激
し且發達せしめ得るの性能とを有し、且人間の全性と無上實

在者の法則との間より一致和合する所ありたるありと云へり。人間の理想の状態の神と合一するにあれば、罪との其反対より出で神と分離するとなり、語を換へて曰ひ、肉なる者が靈より反対して叛逆を企て、若くは靈の勢力を壓抑するとなり、原罪との全く善業を行ふ能力を有せざるに至りたるに於て、此惡に向ふ傾向の人間の意志の助なくしての永續する者に非ず、刑罰を恐れ苦難を怖るゝの念の寧ろ人を損ふ者あり、是れ蓋し救拯に達せんとの動機をして卑陋ならしむればあり、モイセの遺したる人間墮落の物語の唯一人の誘惑の歴史にあらず、一切の誘惑を譬喩的と言ひ顯はしたるものなりと、一行爲も完全より善なる者なく、一瞬時も完全より聖なる者なく、去れど復生したる者も於ては、罪惡の勢力の挫折し去りて、之を行ふ者若くは之が犠牲となれる者も惡果を來す能はず、茲

を以て其罪赦さる、之より反して復生せざる者に於ては、罪惡の之を犯す者及人類全に不治の結果を來す、茲を以て其罪赦されず、有限の原因の唯有限の結果をのみ生じ得る者ありとせば、罪との無限の過失よりあらざるが故に、其結果も亦永遠の刑罰ならざるべし、去れば萬人悉く救の福を得、一切の罪惡悉く跡を隠むる時來るあらん、要するは刑罰の目的の惡を抑へ恐怖の念を起さしむるに過ぎず、

キリストの爲人より就てシェライエルマーヘル氏の抱ける説の左の如し、曰く神性ある生命の流通の神の意識を有するより來る、神の創造的の働より依て、キリストが此世より生れ給ひたる日より、彼より與ふるより特殊なる靈の勢力を以てせり、而して此勢力の漸次より發達し、且彼の靈性の意識の自から漸次より肉性の意識の上より顯はれ來れり、キリストの唯一人前の眞實を

る人間として、人間發達の一切の法則は隨へり、神性實在者の
 自から斯の如き法則は服従する能はず、且自己を限り、自己を
 脱する能はず、此故を以て、キリストの眞は神たる能はざるな
 り、去れどキリストの理想的の完全を有し、人間の理想的の模
 型なり、キリストの絶對的は完全あるはあらず、其宗教的意識
 は於て完全なるなり、而して是れ實は一奇蹟なり、唯キリスト
 は於てのみ無上實在者の理想的の状態は於て住へり、唯キリ
 ストのみ神はある生命の中保者、地上はある神の顯現なり、キ
 リストの恰も生熟する能力を有する萌芽の如く、自身の内は
 完全斬新なる靈の世界を有せり、キリストの神性あるは彼が
 完全なる神の意識を有するを以てなり、キリストの生前存在
 の疑はしく、三位一躰説の其必要を見ずと、又キリストの働は
 關して曰く、キリストの先づ己の有する神の意識の勢力を信

者は通じ、斯くして己の聖善、完全、及福祉を通ずるありと、
 斯くて氏の吾人の高等なる意識と肉性の意識の間は何等の
 分離もなからしめ、曰く自己の力はよりて神の前は義なる者
 一人もあるなし、去れどキリストと活ける交は入るはより、吾
 人銘々の自から何等の價值は有せざるを認め、斯くてキ
 リストと合し、キリストは活かされ、キリストの眞實の一部分
 となり、遂は神の歡び給ふ域は進むなりと、
 復生との、吾人をしてキリストの生命の如き神聖幸福なる生
 命を得せしむるため、吾人の全活動は通じて働く新勢力を造
 るものなり、是れ實は人間の内は、一度失ひたる神の生命を再
 び起すことにして、義とせらる、こと改心の二義を含む、改心と
 は罪の交を脱して神恩の交は入るとあり、改心の二要素は悔
 改と信仰なり、悔改との罪を悲み吾人の行爲を變化せんとす

る決心なり、信仰とのキリストの聖善及福祉を吾が内よ同化するとなり、聖別との此生命の生長するところあり、教會の斯くキリストよ合一せる人々の生命ある會集なり、人の各其復生すべき時よ復生する者なるが故よ、其人の復生が一層速かなりし方其人よ宜かりしならんと考ふるを得ざるあり、一個の理想的の人物に神の満ち足れる靈を與へたるものは、是れ則ちキリストなり、聖靈との世界よある基督教徒全躰を活かしむる神の通常の靈にしてキリストの像なり、然り而して信者の銘々聖靈の特異の方面を實認す、教會の不變なる要素の信者の交の精神と神恩を得るの手段なり、教會の可變の要素の世界に於ける外觀及事業よよりて生ずる教會の状態なり、見へざる教會の見ゆる教會と大よ異よして、後者の多數の眞教會よ屬せざるなりと云ひ、國立教會

の制、一統教會組織、及上下の階級を有する役人の制に反對し、神學形式等の教會分離の傾向を生じ、靈の之を團結せしむと云へり、氏の人間の心情に於ける聖書の勢力を輕視し、直接よ心靈よ交通するキリスト、及忠實ある人物の心靈が他人に及ぼす結果の大勢力を有すと云ひ、新約全書の著述は第一世紀よキリストの門弟子の手に成りたるも、爾來斷へざる進歩ありと云ひ、信者の悉く神の前に祭司なり、言葉の宣傳及晚餐禮の基督教會の事業よして、洗禮の基督教會が自己の腹心よ會員を受け容るゝの式なり、晚餐禮の一禮典よして、此禮典によりてキリストとの生命の交通が教會の腹心よ於て一種特別なる勢力を有する方法を以て維持せらるゝなりと云へり、基督教の靈なる生命の勢力を第一となし、キリストの人類の

理想的模型として、人心を收攬する大勢力を賦與せられ、且信徒銘々の裡に神あるの生命を實現し、此世に來りたるの此神の國を建設せんがためなりとの教會の確守すべき大原理なりと云へり、

倫理學は就て氏の抱きたる説を略述せば左の如し、曰く道德上の善との理性と萬有の合一なり、神の意識の倫理の源にして、其目的とする所の理性の本性を知ることを勤むるよりあり、萬有の理性の機關なり、惡との萬有が未だ理性に貫徹せられず且同化せられざる有様を指して云ふなりと、氏の倫理學を分ちて左の三條とせり、(一)善の説則ち萬有と理性の進歩的合一を論ずる者、(二)徳の説則ち萬有の内にありて前條の諸善を生ずる合理の勢力を論ずる者、(三)義務の説則ち前條の諸徳を行ふに當り遵守すべき規則を論ずる者はなり、

一個人にありて不完全なる理性の人類全躰が相合するの時始めて完全となるものなれば、社交なる者の頗る大切なり、家族も、國家も、社會も、教會も皆切要なる者として、人性の充全となるの男女の合一則ち家族内よ於てのみなり、
 教理學と倫理學の相異を述べんよ、教理學の觀念を論ずるの學、倫理學は行爲を論ずるの學なり、教理學の研究する材料の宗教意識として、其論究する問題の「何であるべきか」なり、倫理學の材料も同じく宗教意識にして、其問題の「何よなるべきか」あり、教理學の基督教意識を其安息の有様よ基きて解釋し、倫理學の之を其活動の有様に基きて解釋す、教理學は内部の交通なり、倫理學の外部の行爲あり、教理學の成文の言葉を要し倫理學の不成文の言葉を要す、

シユライエルマーヘル氏の門弟中最も頭角を表はせる者の

チアンドンデル(Neander, 千七百八十九年—千八百五十年)にして、氏の實に師の欠點を補ふ者なり、シュエライエルマーヘル氏の思辨的なるを反して、チアンドンデル氏の實際的にして、教會歴史の大冢あり、氏の教會歴史の、恰もキリストの麪酵の譬の如くに神性生命の原理が人間の生命に穿通したるとの歴史なり、氏の教會内の各個人を生命を重せり、然り而して其所謂教會とい一統教會の謂にして則ち神の國に外ならず、氏又聖靈則ち信者全軀を働くキリストの靈を重んじ、基督信者の悉く祭司にして福音を宣傳するの義務を有すと云ひ、聖書神學を重んじ、初代教會の自治制にして、監督政治の新約書中に見出されずと云ひ、其警語とする所の「神學者をして神學者たらしむる者の心情なり」と是なり、

ニッツシユ(Nitzsch, 千七百八十七年—千八百六十八年)も亦シュエラ

イエルマーヘル氏の門弟子にして、ヘゲル學派の思辨的神學を反對し、曰く宗教の基礎を感情に置き、宗教的感情の其中に觀念則ち宗教の萌芽たる直接の智識を有す、此觀念の神の言にして、歴史的に顯現し、信仰によりて同化せらる、者なりと、此點は是れ氏とシュエ氏の分る、所あり、

氏の聖書の神の言を包有すと云ひ、神學にの三部分あり、則ち(一)善則ち神及受造物の善、(二)惡則ち罪と死、(三)救拯是れあり、救拯の化身のキリストの爲人にあり、之を同化するの信仰と交通の働により、斯くて遂に救拯の終局に達するありと云へり、氏の學術的と實際的とを區別すると過度にして、且舊式の神學を維持するに餘り力を用ひ過したる痕跡あり、要するに氏の實際的神學者なり、

シュエリアス、ミューレル(Julius Müller, 千八百一年—千八百七十八年)

ハチアッデル氏の門弟として、ヘゲル派の哲學とパウルの批評説に反對せり、氏の自著の基督教の罪惡説なる書中、神と人の有心性及自由性の思想を辯護し、斯て凡神説と必至説に反對し、オリシンの書中に見出さる、靈魂の生前存在説を主唱せり、

右の學派に次で來りしハ所謂新正統派と稱する者にして、シニ氏等の思辨的神學に反動して興りし者あり、該派ハ又敬虔説の助を受けたり、

クラウス、ハルムス (Claus Harms, 千七百八十八年—千八百五十五年) の最初ハ合理説に傾きしがシニ氏の宗教論を讀みて此弊を脱れたり、氏の千八百十七年に、ルーテルの彼有名ある九十五個條に倣りて、九十五個條の論説を公よし、羅馬法王の位に上げられたる人間の理性に反對して合理説と論戰せり、

ヘンクステンベルグ (Hengstenberg, 千八百二年—千八百六十九年) の聖書無謬説及逐字感化説を奉じたり、其他當時の思辨的傾向に反對したる學者の中にハイン (Hahn) あり、マニエル、クルムマーニル (Daniel Krummacker) 及フリードリッヒ、ヴェー、クルムマーニル (Friedrich W. Krummacker) なる兄弟あり、クルツ (Kurtz) 及サルトリアス (Sartorius) あり、

吾人の今一切の教理ハ皆同一にして唯其形狀に於てのみ異なりとなす思辨學派に達せり、カール、ダウブ (Carl Daub, 千七百六十五年—千八百三十六年) ハ此學派の首將の一人あり、氏の最初の間ハカントの説に傾き、宗教ハ道德に基くと云ひ、奇蹟を卻けしが、後變じてシェーリングの説に傾き、曰く神ハ己を人間の理性に顯現し且映射す、而して人間の心靈に於ける神の顯現ハ則ち宗教なり、惡魔ハ實在者にして、自己の創造者、且神

が此世界の救拯を一層確實ならしめんがため許容し給ひたる罪惡の創造者なり、此惡魔はユダヤ化身して化身せる神たるキリストを賣り、初めの自から勝利を得たりと確信せしが、後己の身と己の行爲よ就き失望落膽し、終に己自殺を行ふに至れりと、氏は千八百十六年よヘゲルに面會し、而して學術若くは經驗よ據らずして、單に思辯を以て萬事を探求せんと勤めたり、

マールハイチーケ(Marheineke, 千七百八十年—千八百四十六年)の、天主教よ就き頗る公平無私ある著述を著せし人なり、氏の千八百十九年よ教理上の著述を公にし、教會内に行はる、教理と唯心哲學とを結合せんと試み、ヘゲル派の哲學によりて合理説と超自然説とを中和せんと勤めたり、
學術の觀念を論理的に敷衍したる者、教理學の神と見做され

たる觀念を論理的に敷衍したる者あり、而して此觀念の人間の思想中よ含有せる神自身よ外ならず、此教理學の三個の異なる形状を有す、則ち(一)聖書則ち信條、(二)信者の主觀的信仰(三)思辯的學術是なり、福音との吾人の中よ神の觀念を再現する客觀的の事物なり、故に默示の必要なり、神の絶對なる靈なり、子なる神の自から考へ、愛し、且崇敬し、且子と世界と人神に顯現せる靈なり、キリストの己の自我と世界の同一本體なりと認め、而して此本體の最早個人的ならず普遍なる靈なりと認む、然り而して此靈の教會の腹心に於て絶對にして確實なる自己の意識に達すと、是れ心靈的凡神説なり、
吾人の有する神の觀念の神が自己を觀念しつゝ、ある者にして、神は則ち思想なり、思想と存在と同一なるが故に神は實在す、神の屬性の其本性と同一にして、其本性の表現たるのみ、此

等の屬性の悉く異名同義にして、或の神の本躰則ち父に關係を有し、或の神の主觀性則ち子に關係を有し、或の神の美妙性を有し、或の神の關係を有す、絶對者の自己の意識を有せず、神の識認し給ふ神智の目當の子なり、此子の直接の默示にして、世界の間接の默示、人間の此默示を總括せる者なり、神子と人間の合一の基督論なり、世界の夫れ自身に於ての虚無にして唯思想に於てのみ實在を有す、天地創造と神子出生の神の思想の單一永遠なる開展の二方面あり、人間の靈魂は神の肖像にして、靈魂と神との實躰上唯一なり、罪若くの私心との心事の狹隘なるを指して云ふ者にして、靈魂と神との間の關係を攪亂したる者なり、救拯との靈魂と神とが再度の和合をなすとあり、歴史上のキリストの入間の性情の中に神性の理想を實現したる者なり、キリストはあつて、神の人として己を知り、人の

神として己を知り、無限の性質と有限の性質は元始の唯一に歸らざる、吾人はキリストと和合するとより正義と神性に達するを得、神子の永遠に人間の中に己を化身せる神あり、聖靈の受造物の中より昇り出で滿ち足れる神性に入るの神なり、一個人の死す、去れど靈の有心者たれば其有心者の不滅あり、吾人の個人性を少くするに隨ひ益々幸福を大よするなり、吾人の幸福の吾人の中に己を反省する神の福祉なりと、是れ亦心靈的凡神説にして有心性を否むものなり、其他シルレル(Schiller、千七百五十九年―千八百五年)なる人物あり、氏の宗教は代ふるよ美術を以てせんとせり、又ゲーテ(Goethe、千七百四十九年―千八百卅二年)あり、氏のスピノザの影響を蒙りしも、後イタリヤに行きてより基督教を嫌惡するの情を起したり、其信仰の凡神的にして、人間の智性の内にありて己

を知る神の萬有に貫通し、且萬有の之によりて活かさるゝ者なりと云ひ、且來世の存在を疑へり、齡三十五歳の時語りたる言ふ曰く「余の恰も迷へる羊の如く、余が靈魂の求むる處を見出す能はずして此世界に彷徨す」と、齡七十五歳の時曰く「余の一生の唯苦痛と鬱憂とを以て成り、余が七十五年の一生中唯四週間の純粹なる喜をも筭へ出す能はず」と、氏の臨終の時「余に一層の光明を與へよ」との一語を跡にして此世を逝れり、此等一切の思辨と不安の結果として、獨逸人民の爭論及思辨は倦み疲れ、形而上の學を壓ふに至り、遂に眼を轉じて萬有の研究に従事せり、當時宗教の病性の想像の混雜せる幻夢ありとの感情弘く流布し、處々の學問の淵叢たる地は於て、自然説ある者盛に行はれ、隨て思辯的神學の薄弱となれり、後此反動は對して第二の反動を生じ、學術を蔑視するに至れり、

次に出で來りたるのストラウス(Strauss)千八百八年―千八百七十四年)にして、氏の千八百三十五年に耶穌傳を公にせり、書中共觀福音書の同一の口碑の傳説より來れりとの説を主唱し、ブレツツシエナイデルの約翰傳正確論の攻撃を以て失敗せりとかし、^{ミス、レゼン}虚説、古傳の希臘羅馬の歴史に大部分を占むる者として、^{グ、ヅエ}ヅエツター氏の舊約書も之と全しく虚説古傳を含むと主張せしが、ストラウスに至りて、全一の原理を新約全書に適用せり、氏の説は大きな影響を與へたるのパウロ、シェーリ

ング、及シユライエルマーヘルなり、氏の耶穌傳は於て基督教の中にある超自然を其根底より攻撃せんと云ひ、福音書中より疑はしきか、若くは古傳らしき事蹟を削除し盡すを以て目的となし、福音書中のキリストの教會の想像より生れ出たる虚説にして、一觀念を事實らしき形

狀を以て現レしたる者となせり、此虚説との古傳レと異にして、
 古傳の事實に基礎を有するも虚説の然らずと云ひ、尙進んで
 約翰の福音書の後世の偽作者の作に係ると云へり、氏ハ諸福
 音書の相異の點を誇言し、奇蹟のあり得べからざるを以て
 絶對なる原理と考へ、バプテスマの約翰の誕生の物語、キリス
 トの系圖、キリストの誕生、洗禮、及誘惑の歴史を以て虚説なり
 と云ひ、キリストの固とバプテスマの約翰の弟子なりしが、漸
 次自から救主たるを信するに至り、政治上の王國を設立す
 るを以て其希望となせしなりと云へり、

キリストの唯猶太國の「ラビ」(教師)に過ぎず、其畢生の事業の
 道德上の法律を以てモーセの法律の上に位せしめ、斯くて議
 文を廢せるよあり、キリストの何等の奇蹟をも行ふ能ハざり
 しかど、惡鬼に憑れたりと稱する者を醫するを得たるを以て、

一切の奇蹟をキリストの身ニ歸するに至りしなり、キリスト
 の己の死及復活を預言せるとなく、且晚餐式を設けず、キリス
 トの復活の弟子等の精神錯亂して、キリスト復活の幻象を見、
 且其妄想を回らしたるよ基くなり、

此等の虚説の基礎とありたる二要素を擧げて曰く、救主降臨
 の預望と、キリストの此所望の救主ありとの信仰是れなりと
 去れど考一考すれば、スツラウスの説の何の點ニ於ても餘り
 よ薄弱なり、何となれば福音書中に記載する事蹟の起りたる
 時代と福音書の出でたる時代との間の、虚説の生じ来るに
 餘り短きに過ぎ、且此時代の虚説時代にあらすして歴史時代
 ならばなり、

此耶蘇傳のヘンゲステンベルグ、ジュリアス、ミューレル及ウ
 ーermann (Ulmann) の批評を受けたり、スツラウスのキリストの

二百三十二
宗教的生命の最高位に達したることを許せしも、哲學などに於てのキリストの上に卓越するを得るとなし、キリストの人の靈魂上に及ばず勢力と滋石力に類する一種の勢力を以て一見奇蹟と見ゆる醫療をあすを得たりと云ひしも、該書の最後の出版中よのキリストの勢力に關する此等の認容したる點をも悉く卻けたり、其著述が烈敷攻撃せられたるの故を以て、氏の遂に一千八百四十年に基督教を脱棄し、同年「基督教を理學」なる書を公にせり、此書の「教理系統に類せざるの恰も墓地の市街に似ざるが如し」書中氏の基督教を理を煎じ來れば跡よ残る者の唯凡神的思想のみあることを示し、キリストを以て人類の理想を集合固定したる者ありとし、曰く「人間種族は二個の性質、則ち化身せる神、語を換へて云はば、此世界に降り來りたる無限者と、天上の榮光に似たる有限者との合一した

る者あり、人間種族とは目に見ゆる母と見へざる父、則ち萬有と心靈より生れ出たる小兒なり、若し人間種族の發達を其全躰より見れば、純粹にして垢なく、且一個人の汚濁の全種族の影響を及ぼさざるを以て、人間種族は罪なき者なり、人間種族は死し、復活し、昇天す、然り而して有心性と自然と惑星世界との存在より超越し、上なる世界に昇り出づることにより、天上の無始無終の靈と合一するの福を見るに至る、故に眞實の人類たる者の人類あり、人類のみなり」と、去れど人間種族の來世の希望を有せずとなして、曰く「來世の生命の信仰の學術が打勝つべき最後の敵なり」と、氏の千八百六十四年に「獨逸人民の爲の耶穌傳」なる書を公にし、書中パウルの學派を以て發起點となし、論じて曰く約翰傳の第二世紀の中葉に著はされ、福音書の漸次増補と搜入によりて今日の形をなし、キリストの一賢

人にして、其周圍に附隨せし無學迷信の徒の遂に彼をして奇蹟を行ふ者とならしめたり、吾人の信すべきキリストの永遠なるキリスト、則ち第十九世紀に於て吾人の思想を浮ぶ人類の理想なりと、スツラウスの己を以てルーテルの繼承者たる改革者となし、基督教より超自然の性質を剝除するを以て己の使命となし、一千八百七十年にボルテールに關し、一書を書ひし、ボルテールを以て人心放釋者の一人となせり、一千八百七十二年に「舊信仰と新信仰、表白」なる一書を著ひし、書中己の生涯の結果を概括し、疑問を發して曰く、

(一) 吾人の尙は基督教徒なるや、 氏の使徒信條の條目の悉く近代の思想に撞着すと云ひ、キリストの有心性を否みて、唯理想上のキリストのみ存在すと云ひ、基督教の禮拜の人神に被らしむるに適當する様、切取りたる上衣の如き者なれば、

若し之を純粹の人間に被らしむれば、不締千萬にして少しも適當せず、是を以て唯一神教ユニテリアニズムの頗る薄弱あり、傳説上の信仰の全く基礎を有せず、福音書中に唯曖昧と混雜あるのみ、基督教の佛教と同じく神秘的元素と厭世的元素を有す、キリスト時代の猶太人の性質卑陋、約束の教主によりて救ひんことを望めり、故を以てキリストの約束の教主として己を世に顯はすを得たるあり、キリストの復活との巨大なる虚偽なり、故に、我同胞人類中に之を信する者あり、其信仰に隨ひて奇怪千萬ある結果を生ずるを見れば、吾人の慚愧に堪へざる者あり、イエスの一生の如何に終を告げたるかの吾人の到底確知する能はざる所、恐くは失望落膽の極に陥り、其終を結びしからん、之を要するに吾人の基督教徒に非ず、基督教の虚偽にして吾人の信すべき者に非ずと、

(二) 吾人の尙は宗教を有するか、宗教の起原の恐怖の念なり、神則ち絶対の世界の本躰なり、祈禱の廢せざるべからず、靈魂の身躰と共に死す、要するは世の所謂宗教なる者の迷妄あり、自由と歡喜を以て宇宙に信賴するの感情の是れ宗教の本質にして、今日も尙は存するあり、之に被すに禮拜の形式を以てすべからずと、

(三) スツラウスの宇宙に關する思想如何、宇宙との無數の發達の方面に於ける日月星辰の無限の全躰なり、何物も死滅するとなく、一物の消へ失する時の、異ありたる形狀を以て再現するものなりと云ひ、ダーウソンの學說を承認して一點も卻くるとなく、宇宙の變遷の道程にあり、既し完全なる部分もあり、今尙は進歩しつつ、ある部分もあり、或は最早混沌たる有様は歸りつゝ、ある部分もあり、宇宙は斯く變轉して

際限なしと云へり、

(四) 人生の規則の何ぞや、吾人の中に完全なる人たる模型を實現し、且同胞の中より之が實現を助くるは、吾人の一切の義務を總括せる者なりと云ひ、政治上の主義は於ては、君主專治の政を可となし、普通撰舉法は反對せり、

人間の世界の一大機關の中より存在する者にして、此機關たるや、鐵製有齒の車輪、鐵槌、及巨木槌を有し、人間の何時之を以て捕へられ、引裂かれ、若くは壓碎せらるゝやも測り知るべからず、人間の自己の不滅を期する代に、宇宙の永遠性てふ美しき、觀念を以て満足せざるべからず、宇宙の無上の法則の、生命あり、生命の目的の無限數の變態の生命を生ずるとなり、一個々々の存在の幾千代を通じて流れ出づる此無限の生命の奔流中に或は現はれ、或は消ゆる者なりと、

次に來るの過激なる學派にしてフホイルバフ(Fuhrbach)千八百四年一千八百七十二年は其首將の一人あり、氏のヘゲルの門弟として、後、神學の研究を廢したる人なり、氏の著書「基督教の心髓」の一千八百四十一年に公にせられたり、氏のヘゲルの哲學系統を哲學の舊約全書と稱し、ヘゲルが神と人間を同一視したるの人間と人間とを同一視したるに外ならずして、宗教に於ての人間の己の自我に榮光を歸する者なりと云ひ、是れを吾人の利己の願望を満足せしめ得る神ありと想像し、宗教の吸血鬼(小説中の怪物)として、宇宙間の無上者の人間なり、神も天も唯幻妄にして、人間こそ宇宙の終局の目的あり、而して最後に萬有則ち生氣ある物質の人間よりも高尚なりと云へり、ステルチル(Stern)千八百六年一千八百五十六年の警語に曰く「余の最も自己を愛す、自我の余の信仰問答全軌を覆ふ者なり」

と、又「仁慈と道德の意味なき語なり」と云ひ、思想との物質が有する諸状態中の唯一面に過ぎず、思想の腦髓の分泌物として、其生ずるや、恰も馥郁たる香氣の花英より生ずるが如く、意志の滋養物によりて養はれたる意識の運動ありと云へり、アルノルド、ルーゲー(Arnold Ruge)千八百二年一千八百八十年のヘゲルの門弟にして、其著書「宗教興亡論」の千八百六十九年に世に出でたり、其説に曰く宗教の起原の萬有の幻夢的冥想則ち迷信にあり、基督教の佛教を新たに改作せし者なり、基督教の一虚説あり、人類の戯畫あり、學術の一切斯の如き者を打破して吾人を導きて無神説に至らしめざるべからず、宇宙間無上の存在者の思想力を有する人間なり、無上の善との自由の有様なり、人類の救拯との物質上の繁榮なり、死の萬事の終あり、吾人の禮拜の代り、教化を求めざるべからずと、

ダウメル (Daumer, 千八百年—千八百七十五年) のシェーリング
 の萬有哲學を祖述し、エデンの園は南洋にありと云ひ、エホバ
 のモロクも等しく、猶太の改革黨のエホバの禮拜を棄てたる
 に、キリスト興りて古來の教化を主張し、萬有及萬有の與ふる
 歡樂を嫌ふべきとを宣へ傳へ、而して死するの前、古代の犠牲
 祭を紀念するため、卑むべき飲食の禮典を設けたり、此禮典に
 よりて弟子等の人間の血肉を以て養をなすなり、ユダの大
 之を嫌惡し且之に預るを欲せず、去りて此等基督教の禮典の
 驚くべきとを世よ公にせり、マホメット教の基督教の上に第
 一の進歩をなし、第十四世紀より出たるハフヒツメ (Hafiz) のマホ
 メット教を改良せりと云へり、之に反して、ダウメル氏の新宗
 教の歡樂の原理と肉の回復を以て基礎となし、吾人の理想を
 求むるの熱心を以て自我主義の上に超然たるに至り、且美術

を以て之が助となさるべからずと云へり、然るに晩年に至
 り、氏の天主教を信ずることを表白せり、

ヘゲル學派の直に此等の諸説を祖述し、彼等の用ひたる反説
 奇説の皆過激説虚無説となりて終り果てたり、彼等の互に一
 致する點の共に基督教並に弘く宗教を嫌惡するの一事是を
 り、

セー、エツチ、フロヒター (J. H. Fichte)、ウルリッヒ (Ulrich)、及フロイデ
 レンブルグ (Frendelburg) の基督教有神説を論證せり、

ヘルマン、ブワイセー (Hermann Weisse, 千八百三十三年生) のライプ
 シック大學の教授にして、プロテスタント教會の來世論ある
 著書中、基督教の心髓の三個の觀念、則ち天父、人の子、及天國
 よりありと云ひ、且基督教哲學ある書中、一切の基督教々理を
 悉く理想視せり、

イー、フホーン、ハルトマン (E. Von Hartmann, 千八百四十年生) の改新せる佛教と歴世説を宣へ傳へたり、

ローメル (Rohmer) は凡神説と有神説とを結合し、萬有若くの宇宙を以て神の肺腑若くの機關となせり、

ロツェー (Loze, 千八百十七年—千八百八十一年) の唯物論者の立場より出で、心靈的實在論者とあり、學術的研究によりて有心性の神を信するに至れり、其説に曰く神の實在物と靈物によりておれる秩序整頓せる世界を支配し、神の愛の意志の之を支配し且此等一切の物を掩ふ、神の有心的且含有的にして、萬靈の靈、宇宙を維持改化し、且宇宙に活氣を吹込む力なりと、

吾人の今新聖書批評説に達せり、

福音書中に自家撞着と古傳ありと云ふ、スツラウスの耶蘇傳

の立場を打破らんがため、畢生の力を盡す士尠からず、或の馬可の正確にして信據すべき最初の福音書を書きたりと云ひ、或の馬太路加の兩傳の編輯者の手よなれりと云ひ、或の約翰傳の正確を疑ふ者あり、或は馬可傳も文字上幾度か變化を経たりと云ふ者さへあり、

ブルノー、パウヘル (Bruno Bauer, 千八百九年—千八百八十二年) のブルンケー (Wilke) の祖述者にして、ポーン大學の教授なり、氏の共観福音書批評の千八百四十一年及二年に出で、書中福音記者の福音歴史を工夫し出し、且虚説を妄想せり、馬可の最初に夥多の奇蹟を充ちたるの小説の如き福音書を著し、他の福音記者の之を潤色し、以て最初の材料を心靈的にせりと云ひ、千八百四十二年政府によりて大學の地位より貶せられたる時、激すると甚しく且驕慢無遜を走れり、千八百五十年に保羅

書簡批評を著し、同年及翌年に前の福音書批評よりも一層過激なる福音書新批評を著し、保羅書簡批評中に彼の最初の四書簡の正確なることを否定せり、

エフ、シー、パウエル (E. C. Bauer, 千七百九十二年—千八百六十一年) の千八百二十年より同六十年までナエビンゲン大學の教授たりしが、氏がシユライエルマーヘル氏の描けるキリストの非歴史的あるに反對して、理想の歴史中より存在せず、觀念の或る一個人に於て盡さるゝ者に非すと云へり、氏の大著述家にして、新約全書批評の書を公にし、先づ保羅の書簡より始め、彼得主義と保羅主義の反對の一切の事柄を説明す鍵なりと云ひ、牧會書簡を以て第二世紀の作に繋るとかし、基督教の漸次發達進歩せる者にして、猶太教の中より生れ、久しき争の後遂に猶太教の羈絆を脱せり、初代の猶太的のイエスの預言に適へ

る救主なりしが、保羅に至りて基督教の猶太教、神殿、及摩西律法と公然相反する宇宙的の性質を有する生命の新原力となれり、保羅と彼得、雅各、及約翰との間にの激しき争あり、此争や彼等の死後にまで繼續せしが、第二世紀の中葉に至り、漸く互に相讓る所あり、遂に一致和合して其終を告げたり、是れ實に第一第二世紀間の一切の文學を了解し、且新約聖書中正經の書の確否を定むる鍵なり、此等の文書中前記の二黨派の相異を示すと少き者の後世の作にして所謂「傾向的文書」なりと、羅馬書、哥林多前後書、及加拉太書に此争の熱情を表すと、激烈なる故正經の書にして、眞の正經の書の唯此四書のみあり、加拉太書第二章の使徒行傳第十五章に異なる、使徒行傳記者が保羅と十二使徒の間の相異を成るべく少なからしめんと試みたるを以てなりと云ひ、且十二使徒の保羅が使徒の職權

を有するを論争せりと云へり、

パウルのサルピシアス、セベラス (Salpicius Severus, 三百六十三年—四百十年) の語を引用して、雅各黨のエルサレム滅亡の時まで律法を守り割禮を行へりと云ふと云ひ、且馬太傳及他の共觀福音書中に見出さるゝ偏頗説と、パピアス、ヘゲシパス (Hegesippus) 及ガヨスチン、マシーの如き幾許の初代師父の猶太的性質を引用して、自己の論點を証し、猶太主義の徒黨が准讓を乞して二黨派の合一を來せしめ、第二世紀の中葉激しき迫害の時代なりしを以て、中和的の文書なる使徒行傳、諸書簡、及使徒の手に成ると稱する福音書の、此中和の時代則ち第二世紀の著作にして、使徒等の名を濫用したるは教會の承認を得んが爲なりと云ひ、最初にシ伯來福音書、彼得福音書、エピオナイト福音書、及埃及人福音書と、原始の古傳的物語あり、馬太傳の

此等の書に類似の點を保存すると最も夥しく、且猶太基督教の性質を保存す、去れど後世の附加及變更によりて形を改めたる所少からずと云ひ、路加傳の保羅黨の手よなれるも兩黨の調和を來さんとの自的と彼得黨の或る主義を加ふるとよよりて變化を受けたりと云ひ、馬可傳の一層後年に出でたる者にして、少しも分離の痕跡を留めざれば其價值の最少なりと云ひ、使徒行傳の保羅黨の作よして、二黨派を和一せんと企てたる者なるを以て、該著者の保羅を彼得風に、彼得を保羅風になせり、故に使徒行傳によれば、保羅の猶太人の律法に遵ひて節を守り、ナザレ人の誓約を行ひ、提摩太よ割禮を施し、傳道旅行中第一に猶太人に道を宣傳へたり、又彼得の自由主義の人とせられ、異邦人よ洗禮を授けたりと云ひ、約翰傳の理想的の文書にして、其中の人物の悉く互よ相戦ふ主義、觀念、及

傾向を代表し、キリストに歸したる行爲の唯其説話を説明か
 さんため假し設けたる者なり、第一章の開端にある緒言の該
 書の略説に外あらず、此書の殆んど一戯曲と見做すべき者に
 して、其中よあるキリストの説話の實際有り得べからざると
 且共觀福音書中の説話と大に趣を異にせり、「ロゴス」説のノス
 ナツク説は類似し、踰越節の日の他の福音書に載せたる日と
 異なり、黙示録と約翰傳の相異の點ある故、一人の作ある能ハ
 ず、其著述の日の前後を較するに、約翰傳の方後なりと云ひ、羅
 馬書、哥林多前後書、及加拉太書中よの猶太的基督教に反對す
 る争論を見出し得る故、此四書の正確なり、之に反して以弗所
 書、腓立比書、哥羅西書、腓立門書、及帖撒羅尼迦書の、此争論の痕
 跡を留めず、却て一層實際的なる神學を含むを見れば、保羅時
 代以後の作なると明かなり、此諸書の基督論、基督の個人的生

前存在説、世界創造者としての働に關する説、及隱遁的傾向の
 發達せるを示すと云ひ、牧會書簡の尙ほも後年の作に係り、異
 端に對する駁論あり、教會政治上の組織、及監督政治の存在を
 示すと云へり、之を要するに、パウルの基督教より超自然の性
 質を剝き取らんと企てしが、キリストと基督教とを觀過し、之
 が説明を下さず、特にキリストの復活談及保羅の改心談の解
 明を下さざりき、

シユレーグネル (Schlegel, 千八百十九年—千八百五十七年) 及ツ
 エルネル (Zeller, 千八百十四年生) は共にパウルの門弟ありしが、
 後神學教授の職を廢し、一は古代歴史に移り、一は哲學に従事
 せり、

ヒルゲンフヘルト (Hilgenfeld, 千八百二十三年生) のエナ大學の教
 授にして、稍パウルの説を變せり、氏の説の所謂歴史字義説と

稱する者にして、其説は曰く、馬太傳の著者の馬太自身にして、其著述の紀元五六十年頃あり、去れど紀元七八十年頃に之を改正せる者あり、路加傳の著述の紀元百年若くは百十年頃にあり、馬可傳の著述の馬太傳と路加傳の中間ありて、其著述の目的の馬太傳を簡單にせんが爲め之を改作したるなりと、氏の正純書簡中に帖撒羅尼迦前書、腓立比書、及腓立門書を加へ、約翰傳の著述の紀元百三十年頃ありと云へり、

ユストリン(Kostlin)千八百十九年生、八千八百四十九年より同五十七年まで、チュービンゲン大學の神學教授たりしが、爾後の審美學の教授とされり、氏の大躰ヒルゲンフェルトの説を祖述せり、氏の説に曰く、最初に馬可傳なる一書あり、此書の福音書の第一に出でたる者にして、殘餘の福音書の基礎となれり、去れど此馬可傳の今日の馬可傳に非ず、彼得主義と半宇宙主

義とによりて成れる馬可傳にして、之は馬太の説話を加へて今日の馬太傳を作り、此馬太傳を簡約したるは則ち今日の馬可傳なり、要するに福音歴史の之が基礎たる歴史上の事實を有すと、

フホルンマー(Volkmar)の千八百九年にツリーツヒ府に生れ、長じて同府大學の教授となれり、氏の説に曰く、初代基督教の文書中眞に正確なる者の唯黙示録あるのみ、保羅の一弟子の此黙示録に反對して一書を著し、是れ則ち馬可傳と稱せられ、一般に原初の福音書ありと想像せらるる者なり、然り而して、今日吾人の手にある正經の四福音書は該書を自由自在に改作したる者にして、其著作の目的は初代教會中最初に壓抑せられ終に全勝を奏したる保羅黨の用を供するにあり、特に約翰傳の第二世紀の著作を繋り、ギョスタン、マーマーの書を

據とあしたる者ありと、

ホルステン(Holsten, 千八百二十五年生)のロストックベルン及
ハイデルベルグの教授にして、其説曰く、保羅の資性熱心、癩
癩の激發、奪魂の有様に陥るとなり、爲に古來傳説上の教主説
により、己に現われたりと云ふ、キリストの肖像の形容を見出
せしなりと、

リッツシユル(Ritschl, 千八百二十二年生)のポーン、エツチンゲン
而大學の教授にして、パウルの門弟あるも師の説に反對せり、
氏の第二世紀の基督教の猶太主義と保羅主義の調和に非ず
して、寧ろ保羅主義の發達せるか若くは退步せる者あるとと、
保羅の猶太基督教主義を抱けることを示し、共觀福音書と保
羅の書簡中に約翰福音書に關係を有する點あり、以て該福音
書の正確なることを證すと云ひ、斯くてリッツシユルなどの徒

のパウル學派の主義と方法を適用して却てパウル學派を倒
し、馬可傳は正純にして且最古の福音書なるからんに、該福音
書中彼得の精神と保羅の精神の最も善く調和し居るを見れ
ば、使徒行傳も古く且正確なると疑ひなしと云ひ、約翰傳の正
確なる徵証は日よ益強くなり、保羅の書簡の正純にして、獨逸
よ於てすらも正確なりと認めらるると云へり、以上の是れチユ
ピンゲン學派の大綱領なり、

ルーカー(Luke, 千七百九十一年―千八百五十五年)のゴッチンゲ
ン大學の教授にして、シェーリングの書の感化を蒙り、釋義學
の大家にして、其持説の立場を云へば、聖書研究に於て宗教上
の感覺の切要なるの言語學歴史學上の研究の切要なるよ劣
らず、同性の事物のみ互に能く相識認し「見出さんと熱望する
人のみ、眞に求むる心あり、愛心の充滿せる人のみ能く其深意

に達し、愛も生長して上より光を領くる人のみ能く見出す也」
要するは、神學者の獨立の學術に加ふるに熱心なる敬虔の念
を以てせざるべからずと、氏の約翰の文書に關し四卷の書を
發行し、該福音書及黙示録の正確かりと云へり、

ブリーク (Beek, 千七百九十三年—千八百五十九年) のポーン大
學に於て聖書註釋及批評學の教授たりき、氏の博識公平なる
學者にして、其約翰傳正確論の論旨精明、議論強健、之が反駁を
試むるを得ず、

ステール (Steil, 千八百年—千八百六十二年) のトローツク、ローテ
ー、シルムマーヘルの交友なり、氏のパスルにある傳道學校の
教授として、又牧師と傳道會社監督の任を兼ね、大註釋家にし
て聖書の「インスピレーション」及無謬説と、聖書を了解するに
聖靈の感化を蒙るの必要なることを重視せり、去れど氏の聖

書解釋は餘り想像も走るの恐あり、

マイヤー (Meyer, 千八百年—千八百七十三年) は第一流の註釋家
にして、氏の新約全書註釋の獨逸語註釋書中の良典と稱すべ
し、

其他オルシヤウセン (Olshausen, 千七百九十六年—千八百三十九
年) トローツク (Tholuck, 千七百九十九年—千八百七十七年) など
の士あり、皆ルーケー、ブリーク、マイヤー等と同しく、合理的聖
書論の論争中よ生れたるも、聖書と基督教の大根本に就ては、
確乎たる信仰を維持したる人物あり、

エプラート (Ebrard, 千八百十八年生) のヘルランゲン大學の教授
にして、健全なる神學説を確守し、聖書註釋、教義學、辨證論等有
益なる書を公よせり、

リーム (Rehm, 千八百三十年—千八百八十八年) のハイレ大學の

教授にして、充分に默示を信じ、且聖書の自由批評學者なりき。エーレル(Oehler, 千八百十二年—千八百七十二年)のブレスロー、チュービンゲン兩大學の教授にして、舊約聖書神學に關する大傑作を公にせり、氏の確乎たる積極的の信仰を抱ける人物あり、

ドレツシユレル(Drechsler)のエルランゲン大學の教授にして、創世記及び賽亞書の純一と正確に關する著述をなせり、

カイル(Keil, 千八百七年—千八百八十八年)のヘンクステンベルグの門弟にしてドルバット大學の教授あり、氏の舊約全書諸論、及舊約諸書の註解を漸次公にせり、

エブラルト(Ewald, 千八百三年—千八百七十五年)のチュービンゲン、エツチンゲン兩大學の教授にして、其神學說の自由なりしも、チュービンゲン學派に對して激しき論争をなせり、氏の

說に曰く、諸成文福音書の共通の源をなす者の傳説にして、今日吾人の有する福音書の骨子となりたる簡單なる物語を背ける者あり、第一成文福音書の希伯來語にて書ける腓立比福音書なる者にして、此書のキリスト及弟子等の傳記中重要な事實を包括す、後此書を敷衍して原始馬可傳プロトマテウを作り、次に馬太は希伯來語を以てキリストの教訓を編纂し、馬可及路加の之を參考せりと、

ロイス(Louis, 千八百四年生)のストラスブルグ大學の教授にして歴史家あり、氏はチュービンゲン學派に反對し、パウルの猶太的基督教と保羅主義の反對を誇大にせりと云ひ、約翰傳の正否に於ての狐疑する所あり、共觀福音書の起原、編纂の模様及相互の關係の吾人の確知する能はざる所なりと云ひ、又千八百四十三年に新約全書諸文書の歴史を公にせり、

カイトム(Keim)千八百二十五年―千八百七十八年)のパウルの門弟にしてツリーリヒ、ガイゼン兩大學の教授なり、氏のナザレのイエスの傳なる書を著し、書中パウル程の極端に走らず、キリストの復活は最も健固なる論證の支持する所なることを許し、馬太傳は福音書中最古の者なりと云ひ、キリストも亦幾分か當時の粗雜誤謬の見解を有したりと主張せり、其他今世紀中に頭角を露へせる人物を擧げんに、大希伯來語學者にして自由敬虔ある聖書學者たるフアヘルド(Hugfeldt)あり、チュービンゲン學派と論戦せるレヒレル(Teeller)及マイルシエ(Theisch)あり、新約全書字句の研究に一生を捧げチツシエントルフの爲め、道を備へたる大新約全書學者なるブライチル(Winer)あり、然り而して此チツシエントルフ(Tischendorf)千八百十五年―千八百七十四年)も亦同一の業、一生を捧げたり、氏は

新約全書の希臘語字句を確定せる人物にして、首要なる新約諸書は悉く第二世紀の最初二十五年間に人の知る所、引用する所とされりと云へり、

ブライス(Weis)千八百二十七年生)のベルリン大學の教授にして、現今の聖書批評學の大家の一人あり、氏の説に曰く、馬可傳は首要の福音書として馬太傳及路加傳の基礎なりと、又曰く保羅の宗教的神學の發達に四段あり、第一、帖撒羅尼迦前後書第二、羅馬書、加拉太書、及哥林多前後書、第三、縲紲中の書簡則ち以弗所書及哥羅西書、第四、牧會書簡是なりと、

其他大希伯來語學者たるゲセニアス(Gesenius)千七百八十五年―千八百四十二年)あり、最も過激ある五經論を吐きて、摩西の律法のバビロン追放後に始めて生じたる者なることを主張する、メルハウゼン(Welhausen)千八百四十四年生)の如き人物あり、

加ふる。新ルーセラン運動なる者起り來れり、蓋し千八百四十八年の革命に伴ふ反動として興りたる者にして、其目的とする所の王位及祭壇を擁護するにあり、其敵として戦ふ所は共和政治と國會なり、其敵視する所の敬虔説にして、純粹なる教理を主張し、其重んずる所の第十六七世紀の信條及洗禮式にして、該禮典の人に信仰を與ふる者なりと主張し、プロテスタント教會の教役者の祭司にして、會衆の受働的なりと云へり、

スマール(Saai)千八百二年、千八百六十一年のベルリン大學の教授として、國家の地上の神の國あり、教會の裁判上の制度あり、君主は神の代理として、神の名義に於てのみ政治をなすあり、教會内に權威を有する者の唯默示のみにして、理性の全く之に屈從すべき者あり、革命と合理説との現時の二箇の鞭

答ありと云ひ、各個人の自由、信仰上の事柄の自由討究、國家に於ける自由の決意等を指して罪惡と稱し、共和政體若くは立憲君主政體の萬惡を總括せる者なりと云へり、去れど眞實の有權者を批判する標準を與へざりき、

ローエー(Lohé)千八百八年、千八百七十二年曰く教會外に救拯なく、洗禮の救拯を與ふるの禮典、教會に入るの式なり、ルーセラン教會の最も多くの眞理を有すと、

フラノッ、デリッツシエ(Franz Delitzsch)千八百十三年、千八百九十一年の舊約聖書及聖書神學の研究より一生を捧じ、教て曰く見ゆる教會と見へざる教會の同一あり、教會を養ふ生命の源の諸禮典なりと、ムンシユマイヤー(Munchmeyer)の此説を敷衍して充分なる禮典説を立て、クリーフホッス(Kriehoff)千八百十年(生)は神の國は一切の人類を包括し、救拯の目的の個人より非ず、

人類全躰則ち宇宙なり、救拯の個人によりて傳へるものゝ非ず、却て世界全躰の上に及ぼし給ふ神の働によりて始まり、人民と其制度なる中保を通して個人に及ぶ者なりと云ひ、且個人の上に聖靈の働あることを拒み、神の諸禮典の中に居給ひ、一切の生命の悉く禮典を通して來ると云へり、

フエルマル(Vilmor)千八百年一千八百六十八年の此等の見解を敷延して殆ど羅馬教會の極端に至らしめ、神の言よりも禮典を重んじ、洗禮と晚餐禮の二禮典に加ふるに、懺悔、按手、堅信の諸禮典を以てせり、加之氏の「マス」禮拜の説を奉じ、牧師は毎日教會に行き、教會員のため勸解をなさざるべからず、牧師が祭壇に於て捧ぐる祈禱の大能あるものなりと云へり、

ホフマン(Hofmann)千八百十六年一千八百七十七年の代身的贖罪説に反對して道德上の觀念を教へ、キリストは殉教者とし

て苦を受け、其苦痛は一生涯の全事業の冠をなし、且神の愛と神の罪を惡み給ふことを示し、此二者の彼の苦痛と死に於て其絶頂に達せり、故に彼の罪の挽回者なりと云ひ、人間の正且聖なる救主たるキリストに合一するの故を以て罪を救さるゝなりと云へり、

カーニス(Kahnis)千八百十四年一千八百八十八年)はスツラウス及パウルの學説に反對し、ルーセランの教會とリフホームト教會の「合併説」及調和派に反對し、神子を父の下に位せしめ、聖靈の有心性を疑ひ、聖書の正經を攻撃し、「インスピレーション」の充全なることを否み、聖書中の人間的觀念と默示の漸進的性質を重んじ、且古代の信仰表白に復歸することを求め、基督教は教理に非ず、生命なり、神との交通あり、教理の分離を來し、生命は一致を來すと云へり、

スタインマイヤー(Steineyer, 千八百十二年生)のベルリン大學の辯證學の教授にして、福音書中の超自然を辯護せり、ルートハルト(Lubardt, 千八百二十三年生)のルーゼラン派に屬し、辯證論の講義三部を公せり、則ち「基督教の本源眞理」「基督教の救拯眞理」及「基督教の道德眞理」是れなり、其他約翰福音書註釋を著はし、第四福音書の著者の約翰ありとの説を確守せり、

今より少しく眼を轉じて、所謂調和的學說なる者に就て略述する所あらん、抑も該學派の全教會を第十六七世紀の信仰表白に歸らしめんと欲する新ルーゼラン派と、歴史的基督教と之が基礎たる超自然的事實を打破し去らんとする過激派の中間に立つ者にして、其目的とする所の、宗教上の生命を組織する種々の要素を調和合一せんとするあり、該派の徒の左の

パスカルの語を重んぜり、其語に曰く「一極端に居る者必ずしも偉大なるに非ず、寧ろ同時の兩極端に接し、且其中間に横る一切の事物を占領する者こそ、眞に偉大なるなれ」と是れなり、宗教上の意識も歴史も共に重んぜられ、超自然説の正當にして默示の神の顯現なりと云ひ、宗教上の生命の興起及發達の合理の法則に適ふて來る者なれば合理説も亦正當なりと云ひ、神の含有性と超絶性の吾人の到底調和し得る所にあらざるも、吾人の孰れかの一を撰ばず、二者共を撰び採らざるべからずと云ひ、該説の奇跡の實在を許すも、果して何事か奇跡なりしかを判断するの權利の吾人ありと云ひ、正經書の無謬説若くの字句の全然感化説を容れざるも、聖書を以て宗教上の權威を有する者となせり、

獨逸の該神學派にの精詳明晰の點に於て欠くる所あり、且或

る問題も就ては何等の判断をも下さず、唯沈黙の主義を守り、稍も勇氣を欠くが如くに見ゆる處あり、加ふるに該説の多數人民の間に行はれしめず、却て權威を有する者と合同し、國家の一機關となり、且充分に自由主義を擁護せざりき。

トローツク(Tholuck, 千七百九十九年—千八百七十七年)のキアンデル及モノヒアン派の徒の感化を蒙り、而して千八百二十六
年より、ハイレ大學の教授となりぬ、氏の爲人偉大なる勢力を有し、合理説と論戦し、キリストを愛するの愛心、及基督教は新らしき生命の原力なりとの事實を重んじ、斯くて現今の敬虔説の父とされり、第十七世に關する氏の歴史上の著述の熱心なる基督教の生命を欠ける當時の教理上の爭論の唯教會をして貧弱せらしめたることを示して餘りあり、又羅馬書、詩篇、希伯來書、及約翰傳の註釋を著し、スツラウスの耶穌傳に對し

て「福音歴史の信據すべき」となる書を著し、該書に現はるる弱點の批評的は聖書の起原を研究せざるにあり、氏の「インスピレーション」を救拯に關する真理に限り、預言の超自然的あるも能く人性に適合すと云ひ、獻心の時及「祈禱の應答」ある二書の氏の傑作にして、信仰上の裨益をなす大なり、
ドルテル(Dorner, 千八百九年—千八百八十四年)の大著述家あり、其著書を擧ぐれば「プロテスマント神學歴史」二冊「キリスト身位論歴史」五冊「基督教々理系統」四冊「倫理學系統」一冊等なり、人間ある者の觀念が吾人銘々の内に實現せらるゝ、唯其一部分にして且偏片たるを免れず、去れどキリストに於ては完全實現さるゝなり、キリストの己の一身は一切の孤立せる個人は一切の模型を合一する集合的實在者ありと、是れ氏の基督論あり、氏の説の充分にキリストの神性を容れず、且キリ

ストを以て單に抽象若くは理想とあすの恐あり、去れどキリストの神性のみ能く彼の爲人を解明す者なりと云へり、
 ドルテール氏神の本性を論じて曰く「唯一の有心的なる神の三個の異なる存在の状態を有す、此三状態や離すべからざる模様にて共に合一し、且此三状態の神の盈満性より其自識及愛に至るまで一切の屬性と相寄りて以て神の本性を形造る者なり、此三状態の各一種獨特の模様にて一切の神性を有す、然も此三状態の永遠の結果の唯一絶対なる神性の有心性なり、諸神の有心性の此三状態の各に於て同様よ己を知り且意を働かすを以て、此等の状態の無心性の者と考ふるを得ず、却て其直接なる孤立せる模様を見ずして、其永遠よ一致する所を見て、有心者と稱せざるを得ず、加之、若し子なる神が己の正當なる且永遠なる性質として神性の存在の状態を有すると

同時に、直接に神の絶対なる有心性に預からざるを得るなれば、之と同じく神が子として全く己を人類に通じ、然も人間の有心性と衝突せざるを得る筈なり、而して神子の三個の異なる状態に於て己を知り且意を働かす唯一絶対なる神性の有心性よ間接よ預るを得るとせば、人間も亦自から親密に神性の有心性よ繋かれ得る筈なり、神の完全なる肖像たる子の之と同時に理想的人間、第二のアダムなり、而して斯くて彼の化身の奥義の説明せらるゝなりと、

リヒテンベルゲル(Lichtenberger)氏の前上の語を抜萃したる後よ加へて曰く「吾人の低頭平身して全く之を了解する能はずと云ふ、唯恐る、或は此一見極めて深遠なるが如き思想の下に實際存在する者の、唯無益なる法式上の鳴響、若くは純粹なる言語上の議論よ止まらざるや」と、

トルチルの他の幾多の人々と同じく、到底説明すべからざる事を説明さんと企てつゝあるあり、然して此時端なく吾人の胸中に浮び来るのトイラツクの語にぞある、曰く「余想ふ、人々若し太陽の光線を一條々々分け取る(斯くせば消へ失するの外なし)の代りに、太陽を太陽として考へなば、救拯の言葉を一層能く味ひ得ん、特に現時よ於て然りとなす、郷等の太陽の光線を集めて一束となすを得ず、又大海を一小杯よ入るゝを得ず、余も亦之を試みて失敗せり、敬神の大奥義を量るゝ理論上よて得たる法式てふ規矩を以てせしが、遂に此規矩の余の掌中よ畏縮し果て、而して余の量らんと欲するも量る能はず、遂に之を投げ捨てたり」と、同一の批評の現世紀間獨逸に行はる夥多の思辯に適合するなり、

ライプチル(Leipner, 千八百六年—千八百七十一年)の神秘説を奉

じ、曰くキリストの模型的の人に於て、人間種族の觀念の化身せしものなり、キリストの人間となりたる時、充分人間たるの外観を有せんがため、一切の神性を悉く脱し去れりと、

ラングー(Lange, 千八百二年—千八百八十四年)の詩人的神學者なり、曰く世界の本質の神の本質と同一なり、萬有の靈より出で靈に歸る生命の種子なり、奇蹟の萬有中に新原理の現出せる休徴あり、「インスピレーション」の靈の世界に新原理の現出せる休徴なり、黙示の天地創造の繼續、人性の中に神性の漸次發達進歩するところなりと、

デンマーク國シールランドの監督マーテンセン(Martensen, 千八百八年—千八百八十四年)の有益ある教理學及倫理學系統を公にし、キリストよ於ける神の黙示の神が人間の理性中になし給ひたる黙示の一層高尚ある者なりと云ひ、トルチル及トマ

シアスの基督論の思想を結合改作し、キリストの神と受造物の間に横へる、宇宙間一種特別なる地位を占め、眞實人間とならんが爲其神性を脱ぎ去れりと云ひ、サタンとの惡其物が一個の宇宙的原理とありたる者にして有心性に非ず、サタンは神の長子たるキリストの弟としてキリストに敵する者たるルシフなりと云ひ、主の晩餐の禮典に於てキリストの啗よ己に屬する人々の靈性のみならず其肉性をも完成し、洗禮の人間の儀式として、の信仰表白の働にして之によりて人のキリストの教會に加はるを得、去れど神性の儀式として、吾人の眼に見へざる祭司の長且王たるキリストが、一個人の内よ己の教會を設立し、一個人を聖別して神との眞實の關係に至らしむる働なり、此洗禮なる者、新らしき契約にして、神が人間と結び給ふ救拯の恩惠の約束なり、何となれば神の其人

を多數の罪人の内より撰拔し、其約束に與らしめ、且聖靈の感化と默示の感化の包圍内に來らしむればあり、且此洗禮の復生の沐浴にして、此復生たるや有心性の復生するにあらず、本質及本性の復生するなり」と云へり、

主の晩餐に於て、靈魂の信仰上堅固となり、肉躰の復活の日のために強くせらるゝ、あり、教役者の使徒の繼承者なり、義人の靈魂の死の日より、審判の日に至るまで平和なる夢を見ながら眠り、惡人の靈魂の恐るべき夢を見ながら眠る、基督教は終にの全世界を支配し、而して此地上の榮光のキリストが身自から吾人の眼に見ゆるの形を以て在し給ふとにより、益々發揚せらる、千福年とのキリストに敵する者との最後の戦争及終末審判の來る前にある安息の時なりと、

ベック (Beck, 千八百四年—千八百七十八年) の心靈的聖書神學

者にしてチュービンゲン大學の教授なり、氏曰く神學の宗教的感情を以て起點とあさず、組織的一脉をなせる黙示の言葉を以て起點となさざるべからずと、

フンデルシヤーゲン(Hundershagen, 千八百十年—千八百七十二年)曰く「人類なる觀念の之が眞の源たる神の國ある觀念と共に世界に入り來れり」然り而して此人類なる觀念は、第一にの天主教の階級主義に併吞せられんとし、第二にのプロテスマント教の信條的正統主義に併吞せられんとせりと、

ハゲンバッフ(Hagenbach, 千八百一年—千八百七十四年)の頗る價値ある基督教々理歴史を著のせり、

バイシユラーグ(Beyshlag, 千八百二十三年生)の教會國家分離説を唱へ「ロエス」の有心的生前存在を否定し「ロエス」の神性を有するも父の下に位し、元始には無心性の状態に於て存在し、人

類則ち絶對なる人間の創造されざる模型なりと云へり、

ローテー(Rothe, 千七百七十九年—千八百六十七年)のハイデルベルグ大學の教授として氏に感化を與へたる人物のツインツェンドルフ、トローツク、及ツルムマーヘルの諸氏あり、氏は教會國家合一論を唱へ、教會は國家全軀に穿徹し而して其内に溶散せざるべからずと云へり、

氏曰く思辨の教理を擴張發達するは緊要なり、神は絶對なる有心性にして、此有心性の自然と心靈なる二要素を包括し、此心靈の天賦の反省力、意識、及自由活動力を有す、神の自己より自己を差別し、世界の必然且永遠にして神が自己に反對し給ふにより生ずる非我なり、愛の神の本性にして、神の創造的活動の己を他に與ふるとなりと、

又曰く宇宙は一階段あり、物質より上りて人間に達す、然り而

して此人間の有心性の意識と之に相當する活動の相合一して或るもの也、有心性に於て物質の其形を隠し、而して神の創造的活動によりて全く己を反する者を生せり、人間の四圍にある物質上の勢力を悉く同化せざる可らず、是れ一時に生ずる者にあらず、漸々來る者にして、アダムを始まり、キリストに至りて實現せる也、罪惡との此經驗の必然なる部分なり、キリストは神の創造的活動によりて此世に來り、先づ奇跡を行ひ、イノスピレーションを與へ、以て基督教の始をなせり、世界の終末の來るの實在者の數増加して天地創造の理想を實現するに足るに至りたる曉あり、此時に當りてや、キリスト及聖徒の此地上に歸り來り、地球は形を變じて心靈的の國、則ち天國とあり、宇宙間の他世界との間に完全なる交通の路開けん、默示の目的の人間の内に宗教意識を純精強固になすにあり、

「イノスピレーション」の默示と共に與へられ、奇跡は默示に伴隨す、否寧ろ奇跡は默示によりて成り立ち、其目的の神を人間に明示するにあり、若し神として存在せば奇跡は有り得る者あり、神の己の立て給ひし法則の上あり、且之を支配す、預言は人間に語りたる一切の神の言葉なり、人間が唯自己の力のみによりて知る能はずして神に依りて傳へられたる知識は悉く預言なり、預言の將來の約束、特に教主の約束を含む者なりと、

ブンセン(Bunsen)千七百九十一年―千八百六十年の深奥なる學者にして、宗教上の異説の全く自由寛容にすべきことを信じたるも、基督教の大切なる諸要點を疑はずして信奉し、且約翰福音書の正確なることを辯論證明せり、次に來るの新自由學派なり、該學派中、エナ大學の學術的にし

て左程攻撃的ならず、ヘルリン大學はルーセラン教會とリフ
 ホームド教會の一致を主張し、バーデン大學の新教聯合、則ち
 獨逸國中の過激なる神學者の聯合の擾動に關係を有し、ツ
 リヒ大學は極端なる過激説を奉せり、

ハッセ(Hase、千八百年生)の合理説に反對し、曰く歴史的感覚、宗
 教的感情、及歴史的精神の共よ合理説に反對し、合理説の基督
 教の歴史、感情、及學術を蔑視すと、又曰く人間の本性の自由に
 して、常に有限の界を超脱して無限の界よ上らんとの志望を
 有す、神の絶對ある有心性にして、無偏の愛よ満ち、且宇宙の基
 礎たり、キリストの理想的の人物にして、キリストに於て此人
 間の志望の絶頂に達せり、キリストの罪なし、去れど有限者は
 無限者と合一する能はざる故人、神にあらずと、氏のチューヒ
 ソゲン學派に反對し、約翰傳の正確なると及黙示録の約翰の

作あるとを信奉せり、氏又千八百六十五年に「耶蘇傳」を公にし、
 キリストの自然の發達を有し、且最初より己の死を先見した
 るに非ずと云ひ、且キリストの奇蹟的誕生を否みたり、氏又教
 會歴史を著し、此書や版を重ねると既に拾壹回なり、
 ルツケルト(Ruckert、千七百九十七年—千八百七十一年)のエナ
 大學の教授にして、人間の大问题の、人間の生れかから有する
 理想的の自我が物質性則ち極惡に打勝ち、而して絶對ある自
 我則ち有心性の神よ上り達するとなりと云ひ、救拯とは己の
 實例と信者の胸中に次込む愛の力とを以て、人間が劣等なる
 勢力より救ひ出さるゝを助くる、キリストの人物と離すべか
 らざる神學系統の中心なりと云ひ、主の晚餐の吾人を助けて
 キリストの性質及キリストの吾人に對し有する關係に就き
 活ける意識を更新せしむと云へり、氏は合理説の原理を辯護

し、合理的思想は人を導きて直接に神に至らしむる者も相違ありと云へり、

シュバルツ (Schwarz, 千八百十二年—千八百八十五年) は新教聯合運動の首領の一人にして、其説より曰く、宗教の心底の最も自由深奥なる生命なり、人間が神に向ふ運動なり、黙示の神が人間に向ふ運動なり、宗教が其中心たる神を離れて、學說、學術、若くは道德に分散せば、是れ將より其力を失ふの時あり、教理學は自家撞着の結果を生じ、哲學は絕對者の學、宗教の絕對的生命の學あり、哲學の教理學中より其思辯的要素を取り去らざるべからず、此方法に依りて教理學及該學中の思想の思辯的性質の消滅するなりと、

フライデール (Feilerer, 千八百三十九年生) はベルリン大學の教授として、千八百六十九年に氏の著述「宗教哲學」を發刊し、再

び千八百八十三、四兩年「歴史の基礎に立てたる宗教哲學」を發刊せり、氏のシュライエルマーヘル及ヘゲルの見解を結合し、宗教の本原的性質及人間の宗教的感情を主張せり、ローテは超自然を信受し、フライデールの有心、有意識、且自由なる神の存在を許したるも奇跡を否認し、

ベルリンに於て自由派の此反動に反對し、シュライエルマーヘルを祖述し、意識は宗教の機關、キリストの救拯の唯一の基礎なりと云ひ、教理に就ては全く自由主義を執り、教會政治に就ての自治主義を主張し、且舊信條に反對せり、

新教聯合運動の千八百六十三年ハイデルベルグに始まり、教區の自治權と宗教上の寛容を主張し、且「聯合」を維持するを以て其目的とせり、

シエンケル (Schenker, 千八百十三年—千八百八十五年) の法王至

尊説、則ち法王主權の極端説に反對し、プロテスタント教の要素の教理と制度の組織はあらず、活潑なる活ける主義にあり、然り而して此主義の實現せらるゝの漸進的にして、此生命の全盛ありしはルーテルの時代ありと云ひ、信仰は吾人の生命の奥底の基礎たる神に己を合一せしめんとする意志の働にして、其目的の信者の交と實際上の人類主義なりと云ひ、ルーテルン教會もリフホルムド教會も共々、救拯は神のみより來ると此救拯は信仰の働よりて人間に同化せられざるべからざるとの二點は於て一一致せり、去れど前者の此關係の含有性を重んじ、後者の其超絶性を重んぜり、ルーテルン派の神性中に人性を没するの恐れあり、リフホルムド教會は二者を分離するを度と失し、二元説に陥るの恐れあり、是れ唯學術的問題にして、此二神學系統は互に相補欠

し、以てプロテスタント教理の新模型を出ださるべからずと、氏の千八百五十八、九兩年中に「良心の立脚點より説明したる基督教々理學」なる書を公し、曰く良心は宗教の本據なり、良心よりて吾人の神を識り、且己を永遠の眞理に合一せしむ、良心は宗教上の眞理並に道德上の刺動の源として、智力上の元素と倫理上の元素とを包有すと、又千八百六十四年に「イエスの品格の概略」なる書を公し、超自然に反對し、曰く今日吾人が見る如き醫療奇跡の外に奇跡なるものあるとなく、キリストの山上の變容は唯幻なり、キリストの復活は心靈上の事實にして、弟子等の眼前にキリストの躰が漸次變化したるとなりと、

ホルツマン(Holtzmann, 千八百三十二年生)は其新約全書批評中にエブソルドの研究法とパウロの研究法を結合し、千八百六十

三年に共観福音書の起原及歴史的性質なる書を公よせり、氏の説に曰く、キリストの死、後暫時の間は、主の直ちに此地上に再臨せられんとの期望ありしを以て、其傳記を書くの必要の感せられざりき、去れどキリストの教訓は早く馬太の手によりて書き記されたり、是れ則れバピアスの書中に引照せる馬太の「説話」(ロギア)なる者あり、后よ此説話を希臘語に翻譯せるものあり、馬可は紀元六十年頃ベテロの説話中、自から回想する所を書き記して馬可傳を作れり、此馬可傳は今日吾人の有する馬可傳の基礎なり、紀元七十年頃猶太人のエルサレムよりベラに遁れ去りたる時、今日の馬太傳あるもの先の馬太馬可の書及他の書に基きて編纂せられ、之と同じ頃今日の馬可傳及路加傳は羅馬よ於て編纂せられたりと、

ヒツナツヒ(Hitzig, 千八百七年—千八百七十五年)は舊約聖書學

者よして、「イスラエル人民の歴史」を著はし、イスラエル人はアラビヤの南方より來り、其歴史時代はモーセを以て始まると云へり、

ハウストラッツ(Hausrath, 千八百三十七年生)は千八百六十一年よ保羅傳を發行し、保羅の改心は純粹に主觀的の幻像の結果にして、其神學の唯彼の猶太的意識の發達したるものなりと云へり、

過激なる學派中よはシュバイツェル(Schweizer, 千八百八年—千八百八十八年)あり、氏のストラウスの耶蘇傳を批評し、キリストは實際一個の人物にして、新时期を造り出す創造力を有せりと云ひ、其基督教々理系統なる書中教理學の成立ち得るとを否定し、神の含有的に宇宙よ存在すと云ひ、古來「インスピレーション」の教理を重んずる餘り誇大よ過ぎ、却て神學の進歩

を疵瘉せしめたりと云ひ、キリストの古今無比の宗教上の天才を有せりと云へり、

ビーデルマン(Biedermann)千八百十九年―千八百八十五年のシュエ
バイツェルの同僚にして、千八百六十九年に發行せる基督教
々理學は合理的神學系統中最も學術的なる書なり、書中氏の
神の有心性、靈魂の不滅性及個人の永續性を拒みたり、

フホーゲリン(Vogelin)のビーデルマンに等しき見解を抱けり、
ヒルツェル(Hirzel)千八百十九年―千八百七十一年のツーリヒ
の牧師として、超自然を反對し、人類教教的の見解を教へたり、
ラング(Lang)千八百二十六年―千八百七十六年(も亦ツーリヒ
に住ひ、氏の時間と無始無終、有限と無限、人性と神性、汚俗と神
聖、地上と天上等の如き一切の對照を用ゆるるとも反對し、現在
の事業、歡樂、及衝突の間は幸福を求めよと云へり、

ストローケル(Srocker)千八百三十五年生は宮中説教者にして、
ルリンに住ひ、非社會主義の説と論戦し、殆んど帝王を神性視
し、中世の組合制度を恢復せんと欲し、國家の強迫的生命保險
會社を設け、勞働の時間及日曜日休暇の制を裁定せざるべか
らずと云ひ、且猶太人を駁撃せり、

其他新カント學派あり、該學派はルーテル及シュライエルマ
ーヘルより出で來り、信仰と學術の衝突を打滅するものありと
公言し、宗教意識を重んじ、宗教を形而上學、萬有科學、及歴史的
批評との必然なる關係より分離せんとせり、

リッツシユル(Risch)千八百二十二年生(の説の先にパウル學派
の終方少しの述べ置きしが、再び茲に詳述せん、氏の新カン
ト學派の代表者とも云ふべき人物として、聖書中此處彼處に
孤立せる字句を以て教理を證するの代り、舊新兩約書中に

ある教理の全躰の發達を以て基礎となし、且此教理の其實際上の効力の強弱と宗教上の効果の有無と、心靈的活用の豊否とを以て批判せざるべからずと云ひ、斯くて氏の解義學と、インスピレーションを輕視せり、

最初の信徒の其信仰及精神をキリスト自身より則ちキリストの言葉及爲人より直接に受けたり、聖書の價値の存する所の此書のみ能く初代の純粹なる儘の信者社會の信仰の有様を吾人に知らしむるの點にあり、舊約聖書の新約聖書を了解するに必要なり、基督教の信仰のイスマエルの宗教上の信仰の土中より其根を措き、一切の形而上學的及哲學的思辨の宗教に取ては無用の長物にして、唯吾人をして形而上學的の妄想に陥らしむるのみ、神學と哲學とは分離せざるべからず、最初の信者社會がキリストの爲人と言行に就て與ふる証言の

み、宗教上に正當なる權威を有するものなりと云ひ、シユライエルマーヘルが一個人の信仰及自識を以て權威を有するものとなせしむる反對して、リッツシユールの新約書中にある信仰ある信者社會及其歴史上の証言を以て權威を有する者なりと云ひ、神の國とは道德上の至善にして、此國に屬する者の愛の法則に隨ひて活動し、以て此至善を實現す、是則ち見へざる教會あり、神の愛なり、靈性の有心者なり、絶對なる意志あり、萬有の神の治下にあり、一切の事蹟の悉く基督教徒に執りては或る意味より超自然なり、去れを其中非常なる者あり、キリストの己の言行と其結果によりて己の神性を顯はせり、キリストの生前存在の純粹に理想上の事あり、人は本來誘惑に陥り得るの遺傳性を有し、隨て其自由性の制限せらる、是より於てか自啓の感あり、去れと基督教徒の萬人終りの至善を實現する

の日ありとの壯快ある希望を有すと云ひ、而して氏は人間の道徳性を學術的心理學の上に建て、且此點を強く主張せり、若し公平なる眼を以て、氏の所説の全躰を批評せば、氏の其神學系統を極端に走らしめたりと云ふも過言に非ざるなり

ヘルマン(Herrmann, 千八百四十六年生)はリッツシニルより一層極端に走れり、

カフタン(Kafkan, 千八百四十八年生)の千八百八十四年にペルリッポ於てドルテールの後を繼ぎ、基督教の心髓なる書の著者なり、氏曰く心理學上の觀察は二様の結果を生ず、一は理論上の判斷力、一は實際上の判斷力の源たる感情あり、宗教の第二に屬し、其源の人生の必要と世界の之と與ふる満足との間と人間の感得する調和平均の念なり、道徳の善惡の對照に基き、學術と宗教とを調和せんには、吾人の學術なる者は一定の宗教

上の信仰と同一の結果に達することを證するか、若くは學術の信仰の母たる道徳上の發達に於ては第二位の元素たるを証せざるべからず、基督教の心髓の該教が人間に與ふる善よあり、此善との則ち神の國、至上の善、若くは含有的よして且人間の活働の目當たる超絶的なる道徳上の善なり、キリストの弟子等が此地位に達したるのキリストと交るの生涯に入りたるを以てありと、

シュエルト(Schuetz, 千八百三十六年生)は人間の個人的生命のキリストに於て永遠なる神性の生命を顯はすものとなると云へり、

フランク(Frank, 千八百二十七年生)の新カント學派と反對し、基督教の眞理の源の聖書と基督教會とを符合せる基督教的意識ありと云ひ、而して吾人が實在其物を識る能はざるの性を

論斷する度を失せり、
 天主教徒間に合理説の精神の穿入したるは前世紀の終頃に
 して、獨逸にある天主教會の神學教授及祭司間にあり、
 モーレル(Mohler)千七百九十六年—千八百三十八年)は教會の統
 一を重んじ、自由討究の分派異端の結果を生じ、異説の聖書と
 傳説とを分離し、且聖書を却け若くの毀傷すと云へり、氏の信
 條論の千八百三十二年に發兌せられ、宗教改革の宗教上の必
 要より生じたるも餘り極端に走れりと云ひ、ツレントの大會
 の頗る恰當なる中庸を得たるものよして、プロテスタント教
 徒の信仰によれる義、福音的の自由、宗教的生活と道德的生活
 の關係等を餘り極端に走らしめたりと云へり、
 ゲーレル(Goerres)千七百九十六年—千八百四十八年)及ケッテ
 レル(Ketteler)千八百十一年—千八百七十七年)の法王至尊論者に

して、自由説及教會と國家の改革に反對せり、
 ドルレンゲル(Döllinger)千七百九十九年生)のムーニツヒ大學の
 教授にして、宗教改革を讚賞し、法王の俗世の勢力を有するよ
 りも之を有せざる方寧ろ強しと考へ、且法王無謬説に反對し、
 遂に千八百七十一年に破門に處せられたり、
 吾人は今此略史の終を告げんとするに當り、今世紀間のチセ
 ルランドの神學略史を以て局を結べんと欲す、今世紀の初頃
 變形合理説普ねく全國に行はれ、曰く神の無上の實在者なり
 キリストは一教師なり、人間の純粹に智識的動物なり、罪との
 虚弱なり、改心との矯正あり、聖別との人を高德ならしむるの
 道なりと、其神學の自然神教的、其人間論のベネシァス説、其基
 督論のアリアン説、其救拯説の道德的、而して其の來世論の主
 樂主義なり、グロニンゲン學派は千八百四年より千八百三十

九年の間、ウーツレヒト大學の哲學教授たりしバン、ホイステー(Van Hensde)の創唱に係り、其説に曰く、黙示との人類を導き、神に適ふ有様に至らしむる教育の道あり、神の父あり、人の神の子なり、人の要する者の唯教育あり、而して是れ萬有と歴史と顯ひれたる黙示によりて得らるゝなり、基督教は最も高尚なる宗教にして、其心髓とする所はキリストなる人物にあり、キリストの神にあらざるも、生前に存在し、其働の愛を彰すにありと、

晩近の神學に就ては、シヨルテン(Scholten、千八百八十五年死)の最初保守的なりしが、後其持説を變じ、神の含有的にして一切の受造物も己を顯現し、黙示との創造と保存の謂にして、特別の黙示なるものあるとなく、人間の宗教上道德上共に發達するを要すとの説を奉ずるに至り、聖書中より超自然を取り去れり、

クエーテン(Kuene、千八百二十八年生)の舊約書中より超自然を取り去れり、

オプゾーメル(Opzoomer、千八百二十一年生)の奇跡を否認し、ホークスツラー(Hoekstra)は心情を以て宗教の基礎とせし、吾人の要する神の吾人自身の胸中もありと云へり、

智識派と倫理派の鬭争の今に止まず、第一に信條を棄て、次は聖書を却け、次にキリストの神性を否定し、次はキリストの生前存在、次はキリストの無罪を否定す、斯くてキリストに就て残る所の、唯神の愛を顯現する宗教上の一天才たるのみ、然り而して歸する所、人間の道德性を以て宗教の唯一の基礎となせり、

ウーツレヒト學派の勢力の莫大にして、國民の心髓の今日猶確乎として正統説を奉ず、

ゼー、ゼー、バン、オーステルシー(J. J. Van Oosterzee、千八百七十年生)及ド
 エデス(Doedes、千八百十七年生)の共ハウィッソヒト大學の教授
 として、渾大なる勢力を有したり、此二人の教て曰く、基督教の
 重大なる証據は事實にあり、道德上の受容性素より必要ある
 も是れ該教の基礎に非ず、主觀的確信よりよりて來る大事實の
 信仰こそ該教の大基礎なりと、
 倫理學派に就て云ハんよ、デ、ラ、ッーセー(De La Saussaye)ハニツツ
 シユ、ツブヘステン、ムーレル、ドルテル、及ローテを祖述し、信仰
 と學術とを共に確守し、基督教的經驗を重んじ、信仰ハ心構上
 の事柄にして、生命則ち吾人の内よある聖靈の生命に等しく、
 且生ける人物なるキリストと交りをあすとなりと云ひ、撰定
 とハ神が依つて以て己を人間に通ずるの働なりと云ひ、贖罪
 とハ神と人間との一致をキリストに於て完全からしむるの

働ありと云へり、

第十九世紀の初頃チセルランドの牧師ハ大抵冷淡な流れ、智
 識的に走り、合理的とあり、然して眞誠の信徒等ハ自から相集
 り、古き神學者の説教を読み、以て己の靈を養はざるを得ざる
 有様となれり、該國に於てクリステアン、リフホームト教會ホ
 ーもの千八百三十四年に組織せられたり、
 此一團體ハ今日四百内外の教會を有し、先よ分離をなしたる
 母なる教會よ強き影響を與へたり、此教會の信仰ハ福音的に
 して熱心なる生命を有す、
 現今獨逸よ四派の神學あり、
 第一、信條派若くハ正統派、該派ハ信仰箇條を信奉し、聖書を
 批評するとかくして信受す、
 第二、自由派、該派ハヘゲルとシユライエルマーハルの系統

を合一す、前者の思想中に神を求め、後者の感情中に之を求むる差あるも、共に心中に之を求むるなり。

第三、中庸派、該派のトルキル及ジュリアス、ミューレルの唱ふる所として、信仰と學術の調和を求めて茲に新神學系統を建てたり、今日米國に於て最も勢力を有するの該派なるも、本國獨逸に於ては該派を代表するの人物極めて稀なり、第四、リッツシユル派、該派の明亮は獨逸的學派にして、今日獨逸に於て勝敗を決すべきの該派と自由派なり、

リッツシユル派のキリストを以て大基礎とせし、イエスの教訓と人物に重きを措く、自由派の歴史を以て進化となし、此進化中に神性の理想の漸次道理は適ふて開展し來るとせず、リッツシユル派の唯一の超自然的事實なるキリストの中は默示を見出し、漸次進化する歴史中に之を求めず、自由派の信仰

を以て知るととなし、リッツシユル派の信仰を以て默示の結果となし、キリストは信仰の中心、信條の信仰より生ずるものにして信仰の源にあらずと云ふ、自由派のキリストの人間の理想、聖書の真理の藏なりと云ひ、リッツシユル派のキリストの神の子にして、キリストにある奇蹟的性質の救拯の基とあり、キリストの超自然なるが故に聖書も亦超自然ありと云へり、斯の如く獨逸國の現今の傾向の合理説及唯心説の極端ある地位より積極的の信仰及神學に歸らんとす、此信仰及神學の神性のキリストを以て中心となし、神の人間は與へ給ふ超自然的の默示として聖書中に存する者あり、

シユライエルマーヘルは不信仰を反對して戦を始め、ヘンダステンベルク、チアンダー、ウルマン、トローツク、ミューレル、エブラード、及其他幾多の積極的信仰を有する人物の此戦を繼

けて遂に凱旋の結果を生せしめたり、

結論

吾人の最早や、萬有と、人間と、キリストと、聖書の中に現れたる基督教の大事實に關する諸説の略史に述べ終へたり、殆んど一千九百年間の基督教の歴史中、聖書と、神學と、基督教其物の歴史の示す所に依れば、基督教の大事實の悉く不老の幼壯性を有し、不滅の眞理を含蓄し、枯死する能はず、打滅す可らざる者あり、學説の變ずるとあるならん、人爲の系統の舊廢し歸るすことあるならん、此一千九百年の大道の諸學説、諸系統の碎片の散在するを見るあり、基督教の生命其物すら時よ或は低潮よあるかの如くに見へ、隠れたる敵と隠れざる敵との共に雀躍して「基督教の最早存在せず、」聖書の權威の失せて跡な

く」と云ふを得ん、去れど聖書、神學、基督教、及基督の教會の其基礎として無限の愛を含有し、其軀軀として無限の眞理を有し、其中心として神性のキリストを有し、其精神生命として神性の仲保者たる聖靈を有し、而して其偉大なる、生ける、根源の眞理よ關しての、變化することなく、陰隠することなく、滅亡するところなく、益々進み行きて止む所を知らざるなり、此大眞理の時に或の虚禮、執拗、若くの偏理のため光輝を失ひ、若くの陰蔽せらるるが如くよ見ゆることあるならん、去れど、眞理と愛と生命の太陽の幾分か此太陽を吾人より隠れしむる陰雲、若くの一時の流星の上よ明光を放ちて照り渡ると以前よ少しも異なるなく、而して少時の後以前よりも一層燦爛たる光輝を以て陰雲を破りて現れ出づるあり、
吾人の聖書に就ても、基督教よ就ても、教會よ就ても、何等の恐

怖を懐く必要なし、蓋し是れキリストなる巖の上に立てられ、而して「陰府の門の之は勝つべからざればなり」吾人の確知す、聖書中神性の元素を蔑視し輕視する合理的批評なるものの或の幾分の人々若くは或る社會の者を誘導して一時生命の言葉の價値を減せしむるを、去れど聖書の死せざるなり、聖書の神性の書たるを失はざるあり、超自然を棄て、人の理性を以て教導となし、單に之は任ずる神學系統は世智の人には人望を有するならん、去れど斯の如き者の長く生命を保つ能はず、且其結果は人の熱情を冷却せしむるのみ、聖書中より神性の分子を取り去り、キリストを人間的に解釋し、神學を合理的に論ずる教會の、一時の所謂宗教哲學者の會集として盛ゆるとあらん、去れど是れ世界の要する救に至る神の大能たらざるなり、

嘗て教會は瀰漫し、若くは今日蔓延しつゝ、ある此等の虚禮的、合理的、及び人類教的波瀾の實例の、終は人類をして、神が聖書とキリストに於て人間に與へたる超自然的默示に基く大中心たる事實を措ひて、他は平和なく、安全なく、且つ眞實の進歩なきことを知らしむるならん、現時の批評と、爭論と、所謂新神學の中流は立ちて、吾人の彼殉教者たる大統領リンコンの不滅の一語を取つて吾人の警語となさん、曰く「誰も惡意を懐かず、萬人は向つて愛心を懷き、神の吾人に見せしむる處に隨ひ、正義の上は確乎として立ち、吾人がなすべき事業を成就せんため、鞠究勉勵せん」と、吾人の主の教會が、其歴史は於て以前に見ざる程、目を醒して己の使命の主の使命に等しくおるとを實認し、且益々實際上の働に力を込め、此世の王國を吾人の主たるイエス、キリストの王國とあさんとするため勉む

るを見て喜ばん、吾人のキリストの命令とキリストの大心情に適ひたる此實地神學の種々の學說を判定し、且教會を導きて學說に走ると尠からしめ、若くは無益なる學說は時間を浪費すると尠あからしむることを確信して心を安せん、

神が己の教會のため、過去の萬世に於て、默示と、贖罪と、救拯に於て既になし給ひたる無限の働を見、教會が完全なる成功を奏するとの榮光ある神の約束を見、合せて過去に於て其一切の敵を制したる勝利と現在の凱旋的進歩を見、吾人の喜び勇んでロンドン・ハーローの詩を唱せん、其詩は曰く、

Sail on, sail on, O Ship of Christ!

Sail on, O Life-boat, strong and great!

Humanity with all its fears,

With all the hopes of future years,

Is hanging breathless on thy fate!

We know what Master laid thy keel,
What workman wrought thy ribs of steel,
Who made each mast, and sail, and rope,
What anvils rang, what hammers beat,
In what a forge and what a beat
Were shaped the anchors of thy hope!
Fear not each sudden sound and shock,
'Tis of the wave and not the rock!
'Tis but the flapping of the sail,
And not a rent made by the gale!
In spite of rock and tempests' roar,
In spite of false lights on the shore,
Sail on, nor fear to breast the sea!
Our hearts, our hopes, are all with thee,
Our hearts, our hopes, our prayers, our tears,
Our faith triumphant o'er our fears,
Are all with thee,—are all with thee!"

漕げよ進めよ主のみ船
予等の希望を抱きつゝ
呼吸も忍へて汝を待つ

強く大なる主のみふね
予等の恐懼を抱きつゝ

汝が龍骨をよこたへし
汝が鋼鐵のそのわき木
誰が作りしか吾知れり

汝が船主のたれなるか
ほばしら帆又その綱の

鐵砧の鳴り金槌の打ち
あかき焔の火に堪へて
汝のいかりの造られぬ

溶鐵爐の中に燃立つる
汝の希望のごとくよも

激震と音響を恐るゝな

岩にあたりし音ならず

疾風の送りし罅ならず
帆を吹く風のひいき也

浪の打來るひいきなり

あらしの如何に叫ぶ共
海岸の燈臺火暗偽とも
海に對ふを恐怖るゝ亦

岩打つ浪のあらくとも
漕ぎつゝ進め主の御船

予等の心とそのゝぞみ
恐怖の念慮に打勝ちて
汝と共に在るぞかし

祈願と涕とその信仰の
汝と共に在るぞかし

基督教教理略史畢

19/7/34

明治二十六年九月十三日印刷

明治二十六年九月二十日出版

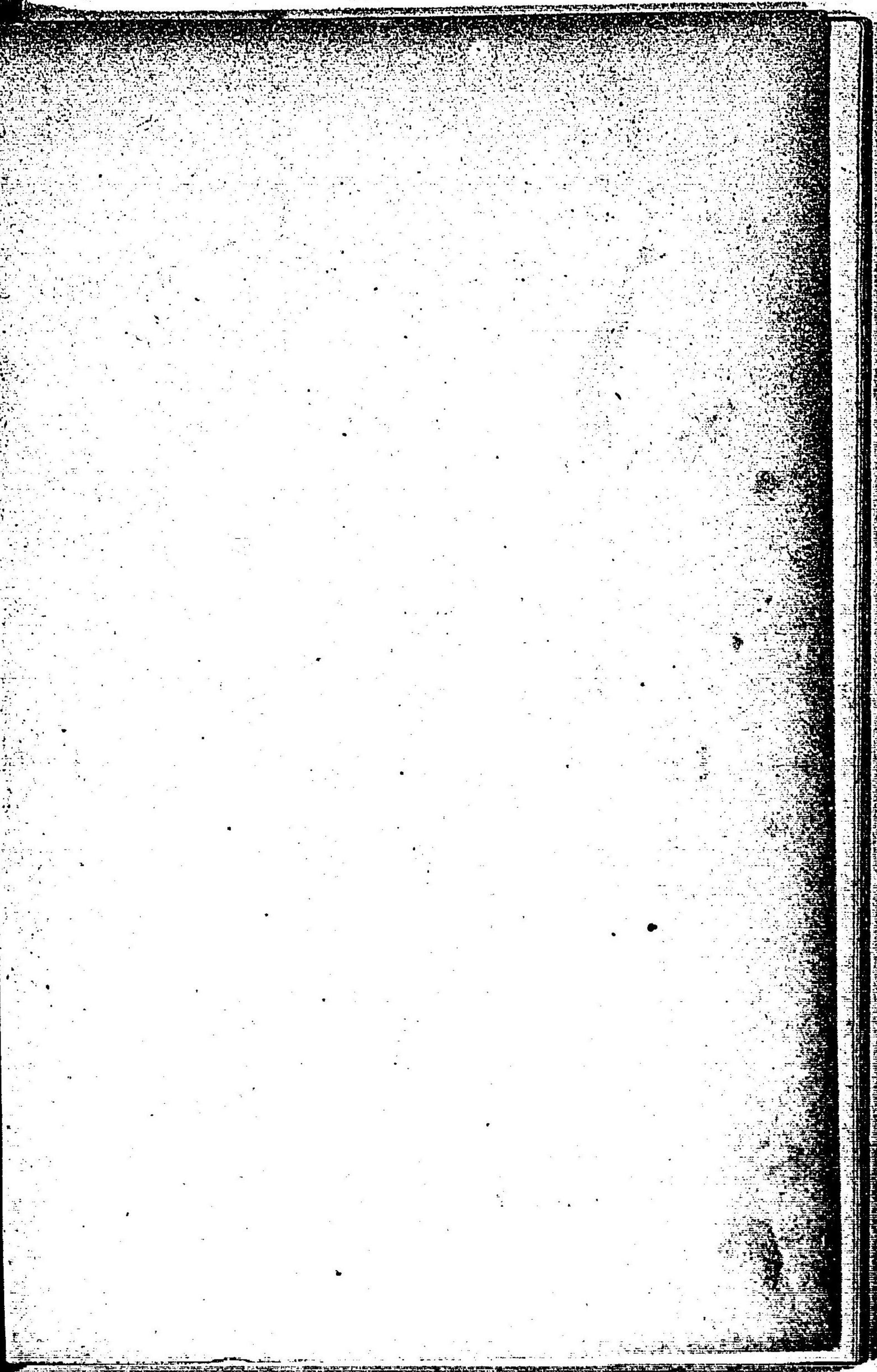
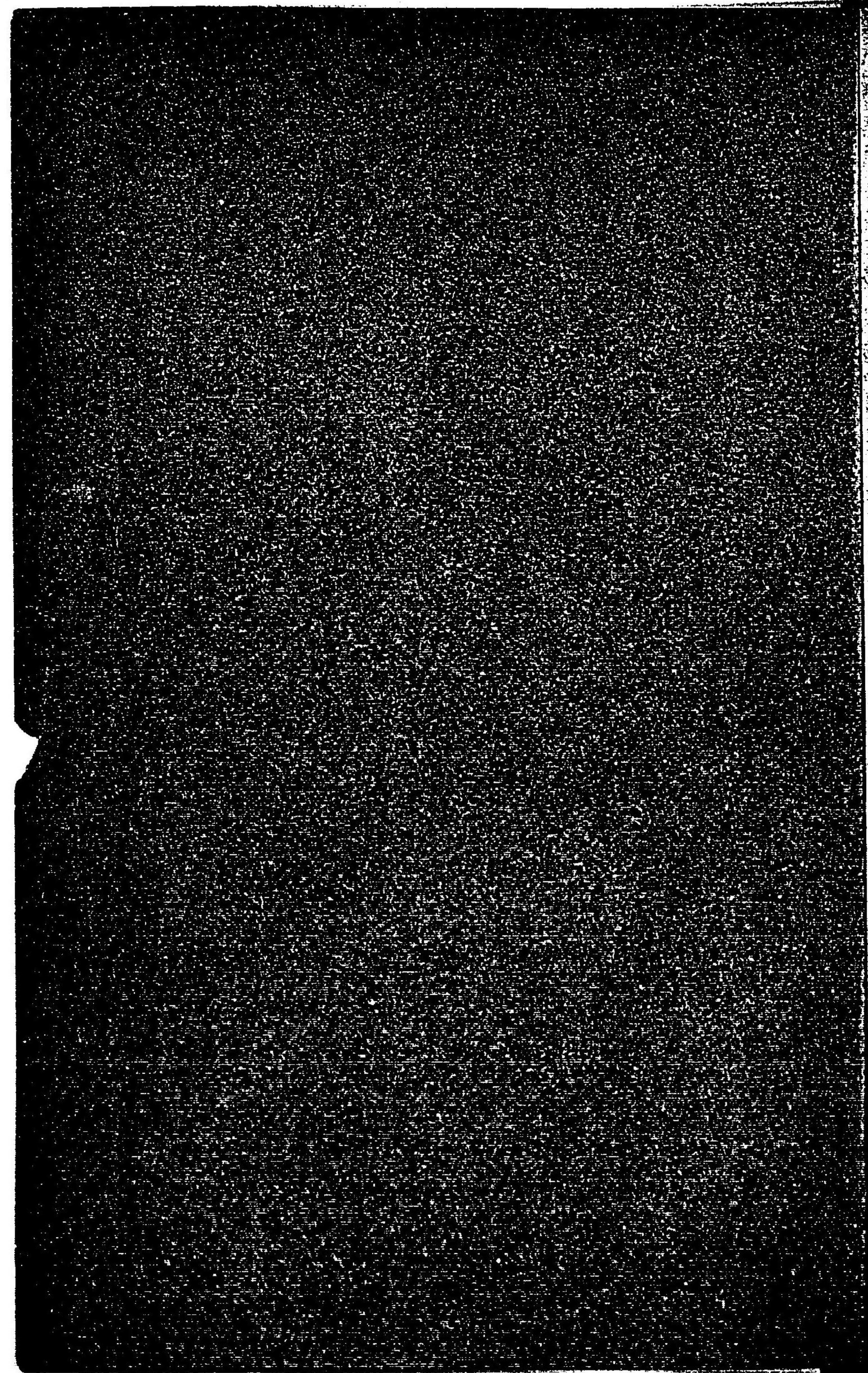
譯者 坂田 貞之助

京都市上京區相國寺門前町
一番戶同志社寄留

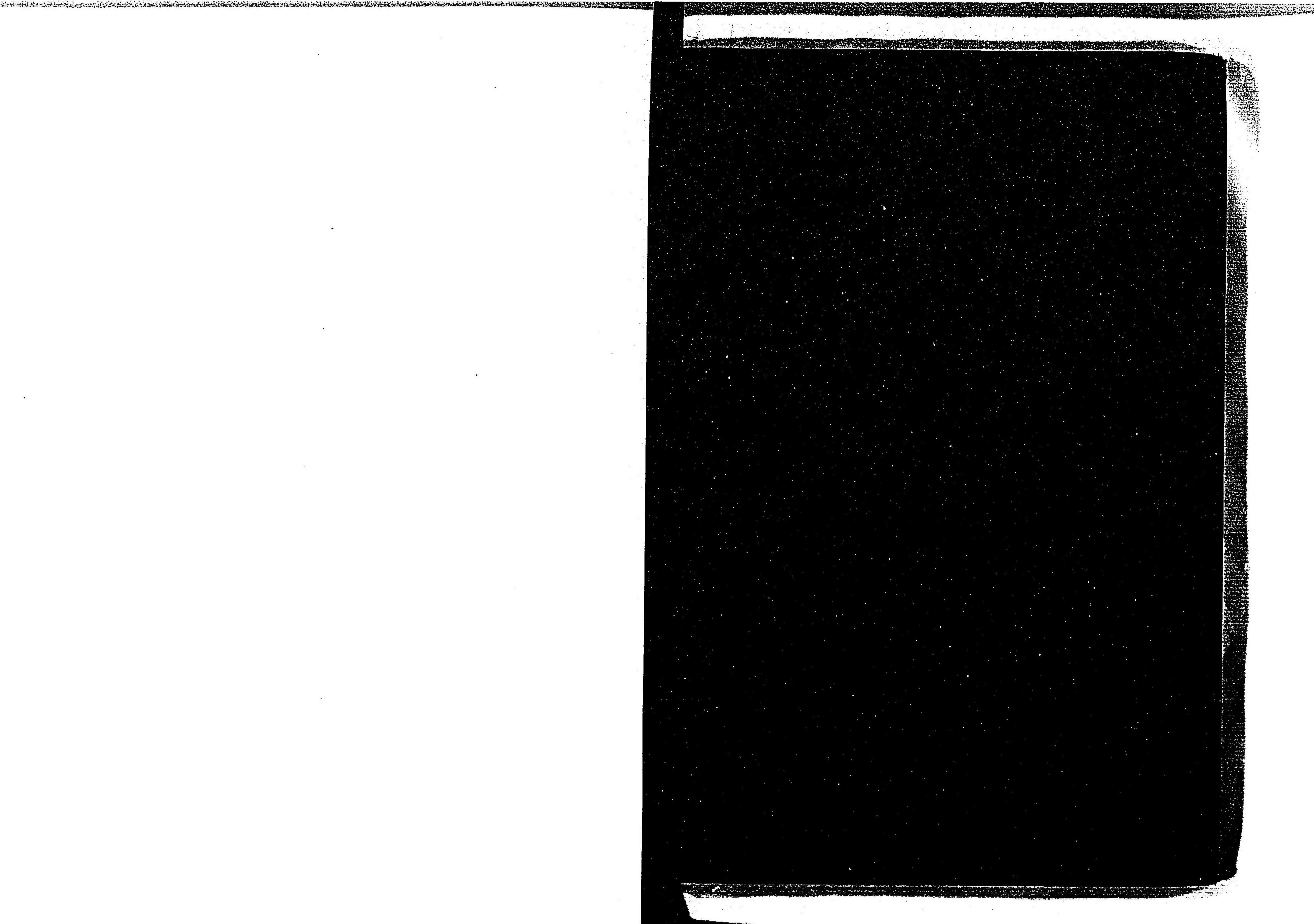
印發 副行者兼 今村 謙吉

大阪市西區土佐堀三丁目卅八番屋敷

發行所 福音社
大阪市土佐堀三丁目



70
170



020441-000-5

70-170

基督教教理略史

デビス/著

M26

ABI-0251



